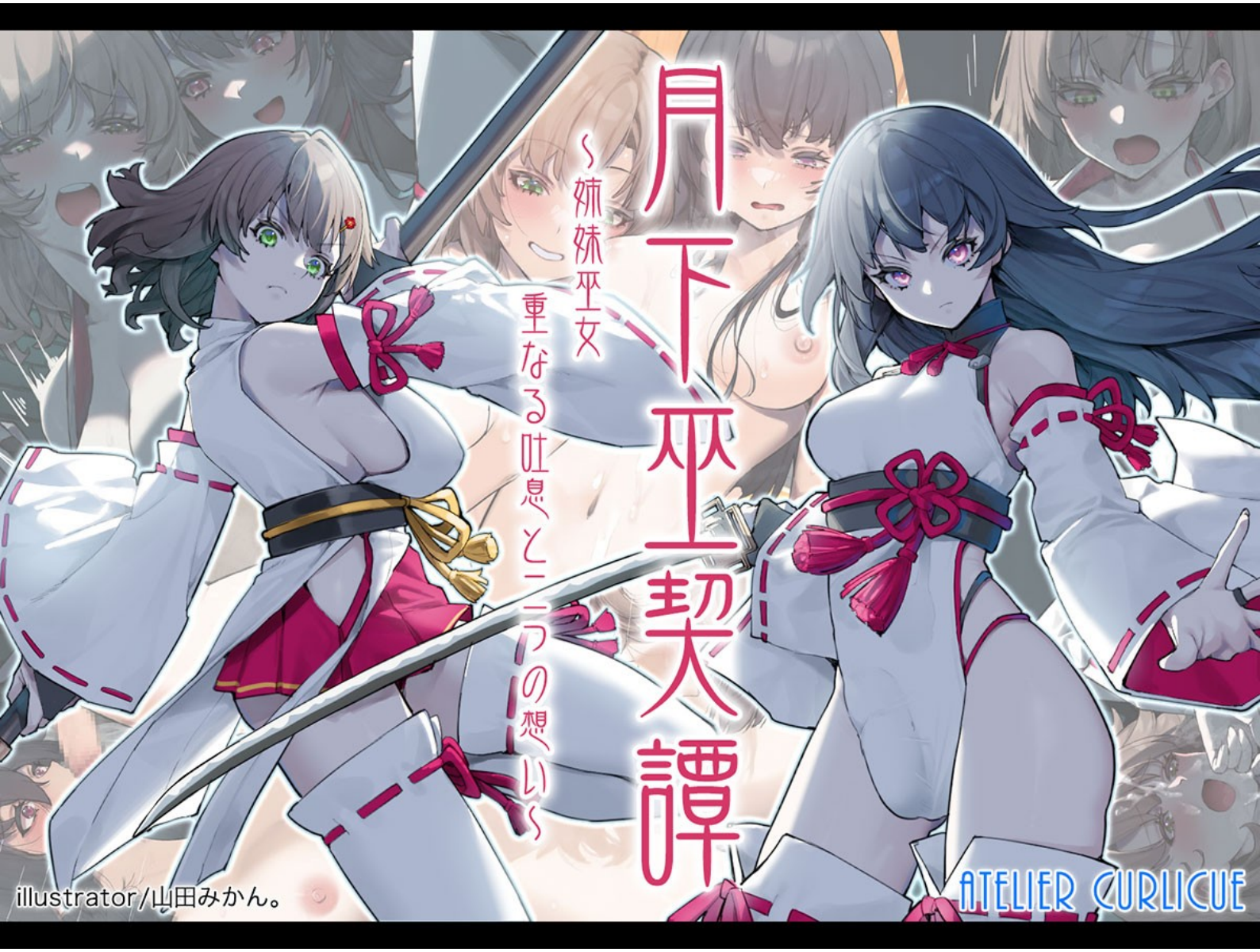
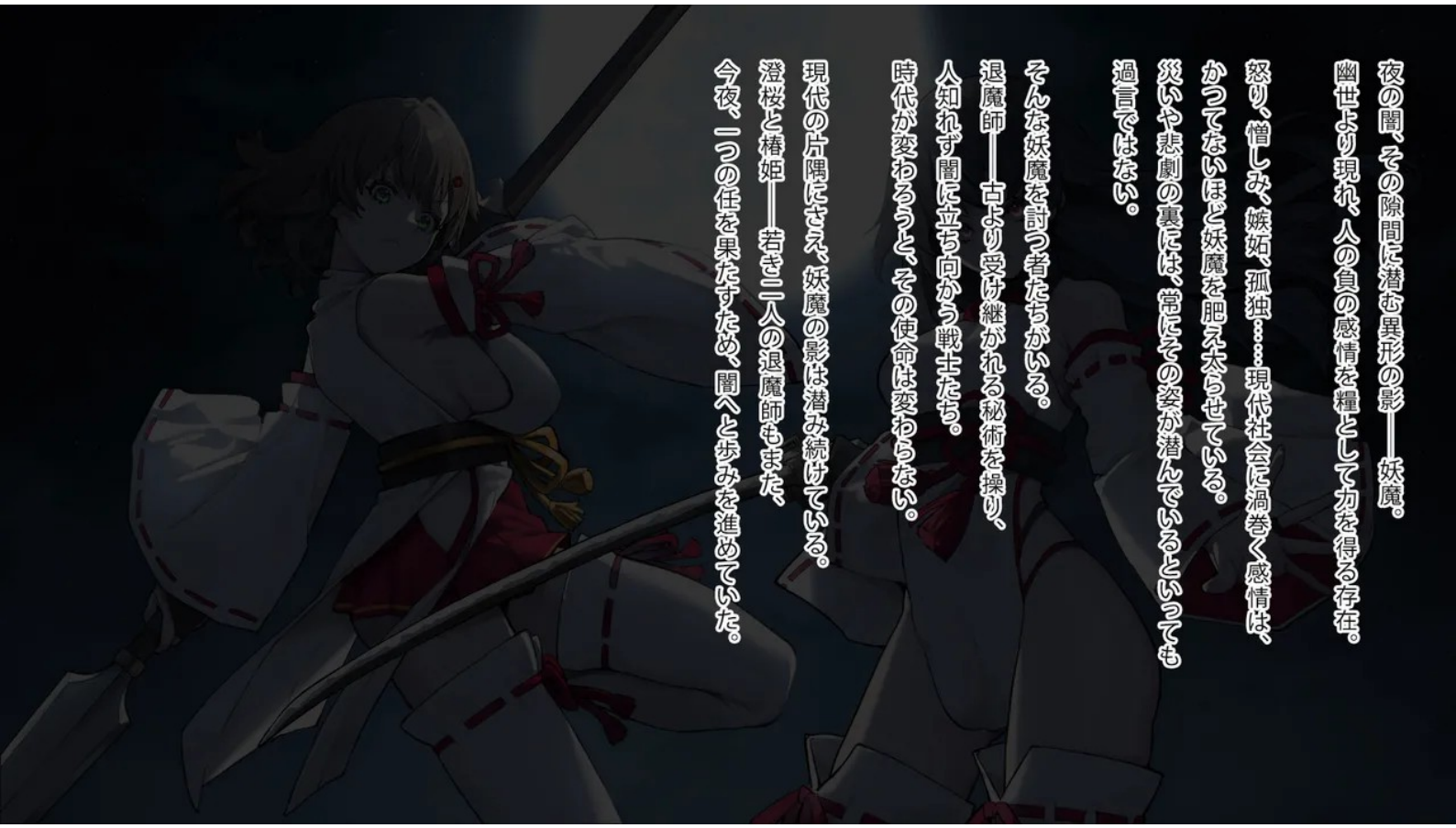

月下巫契譚
～姉妹巫女 重なる吐息と二つの想い～
illustrator/山田みかん。
ATELIER CURLICUE


夜の闇、その隙間に潜む異形の影――妖魔。
幽世より現れ、人の負の感情を糧として力を得る存在。
怒り、憎しみ、嫉妬、孤独……現代社会に渦巻く感情は、
かつてないほど妖魔を肥え太らせている。
災いや悲劇の裏には、常にその姿が潜んでいるといっても
過言ではない。
そんな妖魔を討つ者たちがいる。
退魔師――古より受け継がれる秘術を操り、
人知れず闇に立ち向かう戦士たち。
時代が変わろうと、その使命は変わらない。
現代の片隅にさえ、妖魔の影は潜み続けている。
澄桜と椿姫――若き二人の退魔師もまた、
今夜、一つの任を果たすため、闇へと歩みを進めていた。


シャキン
「椿姫！小さいのがそっちに回ったわ、援護をお願い！」
「任せてください、姉様！」
闇夜を駆ける、二つの白い影。
澄桜と椿姫――退魔の血を継ぐ少女たちは、
妖魔討伐の任にあたっていた。
「……低級妖魔のくせに、逃げ足だけは一人前ね。
椿姫、あれを使うわよ！」
「――了解です！」


澄桜は一瞬で呼吸を整え、己の霊力を一点に集中させる。
手にした刀が、淡い白光を帯び始めた。
「神刀・破邪滅魔――ッ!!」
渾身の一閃。
放たれた清浄なる刃は、闇に紛れた妖魔を鮮やかに貫いた。
キィンッ

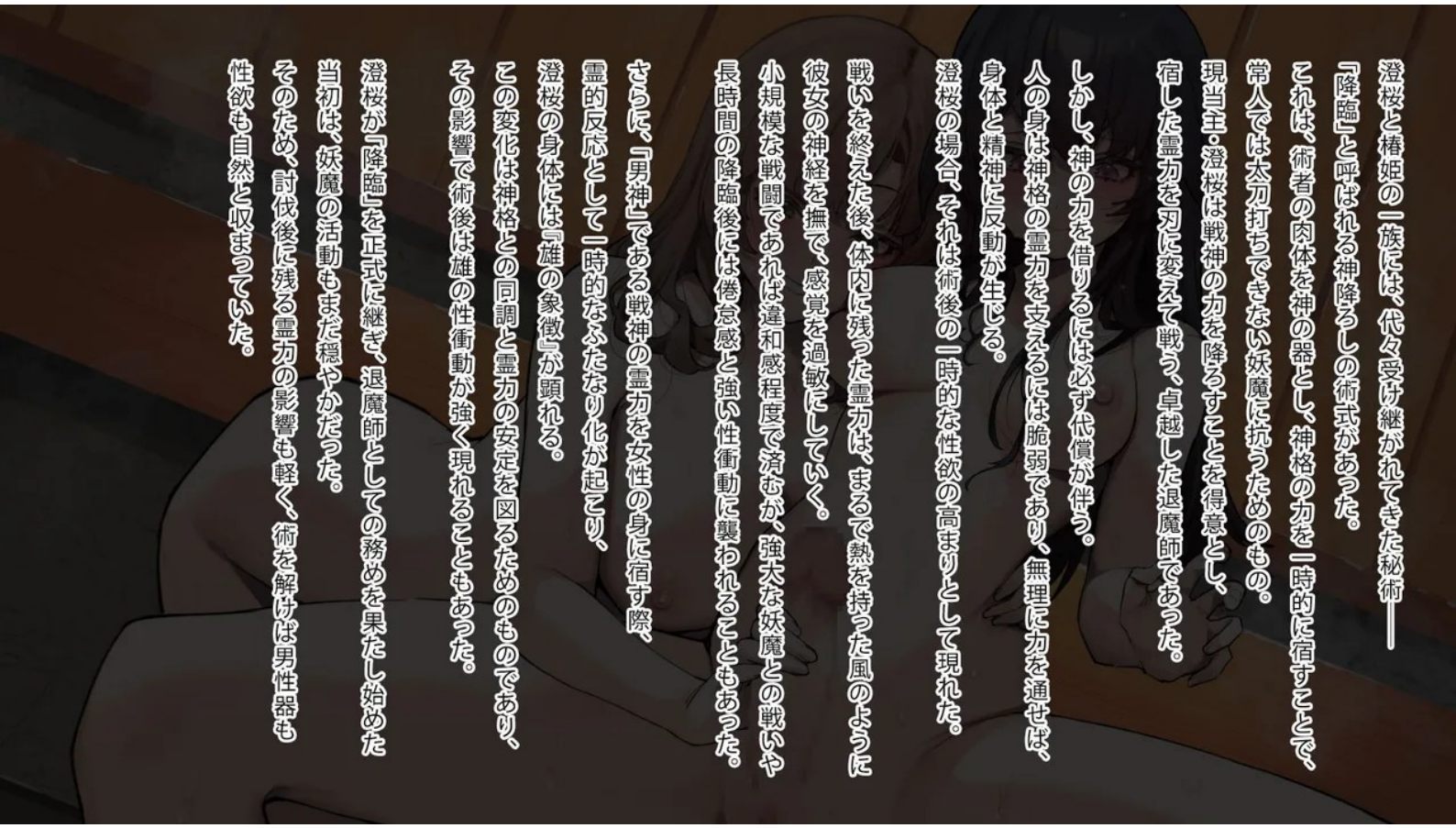

「姉様ぁ～～っ!!」
澄桜が最後の妖魔を祓い終えるや否や、
椿姫が勢いよく抱きついてくる。
びくっ
ガバッ
むにゅっ
「さっすが姉様！　やっぱり頼りになりますっ！」
「ちょ、ちょっと……椿姫、近いわっ」
彼女の全身を使ったオーバーな感情表現には慣れていても、
こうして肌を寄せられると、さすがに気恥ずかしい。
むちっ
「……でも、今回は椿姫もよく頑張ってくれたわね」
「えへへ～～♥」


「もっと褒めてもいいんですよ？
いっそこ褒美に、姉様のチューとか……ん～～♥」
も、もう…
んん～～♥
むにゅっ
むちっ
「も、もう……っ、椿姫ったら！」
「ん～～♥　姉様ぁ～～ん♥」
「だ、だめよ！
そういうのは……その、とにかく、今は……なしっ！」


「え～～、姉様のケチー　一回くらい、いいじゃないですかぁー」
「そういうのは……その……えっ、と……」
むぅ～～っ
むにゅっ
むちっ
顔を赤らめて目をそらす澄桜。
けれど椿姫はまったく引く気配を見せない。
「どうしてダメなんですか？　ちゃんと答えてください、姉様っ」
「それは……っ、その――――」


「ひゃっ……!!」
不意に、澄桜の身体がビクンと震える。
まるで電撃のような衝撃に、思わず声が漏れた。
ビクンッ
えっ!?
ビクッ
「姉様……？　あ……もしかして――っ」
「……そう、みたい。
今日は……霊力を解放しすぎたから、その反動で……」
「――っ、すぐに屋敷に戻りましょう！」





澄桜と椿姫の一族には、代々受け継がれてきた秘術――
「降臨」と呼ばれる神降ろしの術式があった。
これは、術者の肉体を神の器とし、神格の力を一時的に宿すことで、
常人では太刀打ちできない妖魔に抗うためのもの。
現当主・澄桜は戦神の力を降ろすことを得意とし、
宿した霊力を刃に変えて戦う、卓越した退魔師であった。

しかし、神の力を借りるには必ず代償が伴う。
人の身は神格の霊力を支えるには脆弱であり、無理に力を通せば、
身体と精神に反動が生じる。
澄桜の場合、それは術後の一時的な性欲の高まりとして現れた。

戦いを終えた後、体内に残った霊力は、まるで熱を持った風のように
彼女の神経を撫で、感覚を過敏にしていく。
小規模な戦闘であれば違和感程度で済むが、強大な妖魔との戦いや
長時間の降臨後には倦怠感と強い性衝動に襲われることもあった。

さらに、「男神」である戦神の霊力を女性の身に宿す際、
霊的反応として一時的なふたなり化が起こり、
澄桜の身体には『雄の象徴』が顕れる。
この変化は神格との同調と霊力の安定を図るためのものであり、
その影響で術後は雄の性衝動が強く現れることもあった。

澄桜が「降臨」を正式に継ぎ、退魔師としての務めを果たし始めた
当初は、妖魔の活動もまだ穏やかだった。
そのため、討伐後に残る霊力の影響も軽く、術を解けば男性器も
性欲も自然と収まっていた。


ところが、最近になって妖魔たちの力が目に見えて増してきていた。
それに伴って、降臨で消費する霊力量が格段に増え、神格の力を
深く引き込めば引き込むほどに、解除だけでは抑えきれないほどの
熱が澄桜の中に残るようになっていた。
特に、戦神の性質によって顕れるふたなりの象徴は、雄としての
衝動を容赦なく彼女の身体に刻みつけてくる。
自分の中に湧きあがる欲望に、あの子を触れさせてはいけない――
澄桜は心の奥で、ずっとそう言い聞かせてきた。
けれども、衝動は日ごとに強まり、ついに自分一人では抑えきれなく
なっていく。
そんな時、そっと寄り添い、手を差し伸べてくれたのが椿姫だった。
幼い頃から姉妹のように育った彼女にだけは、少しだけ頼っても
いいのかもしれない……
そうして始まった椿姫との「禊」は、二人の間に静かに根づいていった。
それでも澄桜は、最後の一線だけは越えまいと心に決めていた。
椿姫を、自分の欲望を押しつける存在にしてはいけない。
その思いだけが、理性を保つための最後の支えだった。


湯けむりが低く漂う洗い場の片隅。
澄桜は背を椿姫に預け、静かに息をついていた。
湯気にまぎれて、肌を伝う水音だけが静かに響く。
かぁっ
はぁ
はぁ
はぁ
びくっ
ぎゅっ
「姉様……、今日もぱんぱん、ですね」
「……っ、そんなこと言わないで……余計に恥ずかしくなるから……」
「ふふ……でも、指先に、姉様の鼓動が伝わってきて……
すごく熱くて、かわいくて……」
「……椿姫、じらさないで……お願い……」
「大丈夫です、姉様が気持ちよくなれるよう、
ゆっくりはじめますね……」


濡れた指が澄桜の昂ぶりをそっと撫で、
柔らかな熱がゆっくりと拡がっていく。
んんっ
はぁ
はぁ
はぁ
ビクンッ
しこ
しこ
しゅっ
しゅっ
「んっ……ぁ……っ……だめ……そんなふうに、根元まで……っ」
「だめじゃないです。ちゃんと全体を刺激してあげないと……
ほら、びくびくって反応してます」
「……ぁっ、やっ……そんな擦られたら……
んんっ……頭っ、真っ白になっちゃ……っ」
「それでいいんです、声も我慢しないで……
姉様の全部、私に委ねてください」


「だ、だめ……そんな……椿姫に、こんな姿……
見せたくないのに……っ」
あっ
はぁ
はぁ
はぁ
「私が見ていたいんです。
姉様の感じてるところも、甘えてくれるところも……」
「椿姫……んっ……そんなこと言われたら……
わたし……もう……っ」
肌を滑る指先が、ためらいを溶かすように深部へ熱を染み込ませる。
強がっても、呼吸を止めても、
快感は零れ落ちて澄桜の声を震わせた。
「もっと……私にだけ、見せてください。
姉様の気持ちいいとこ……全部……」
ビクビクッ
しこしこしゅっしゅっ

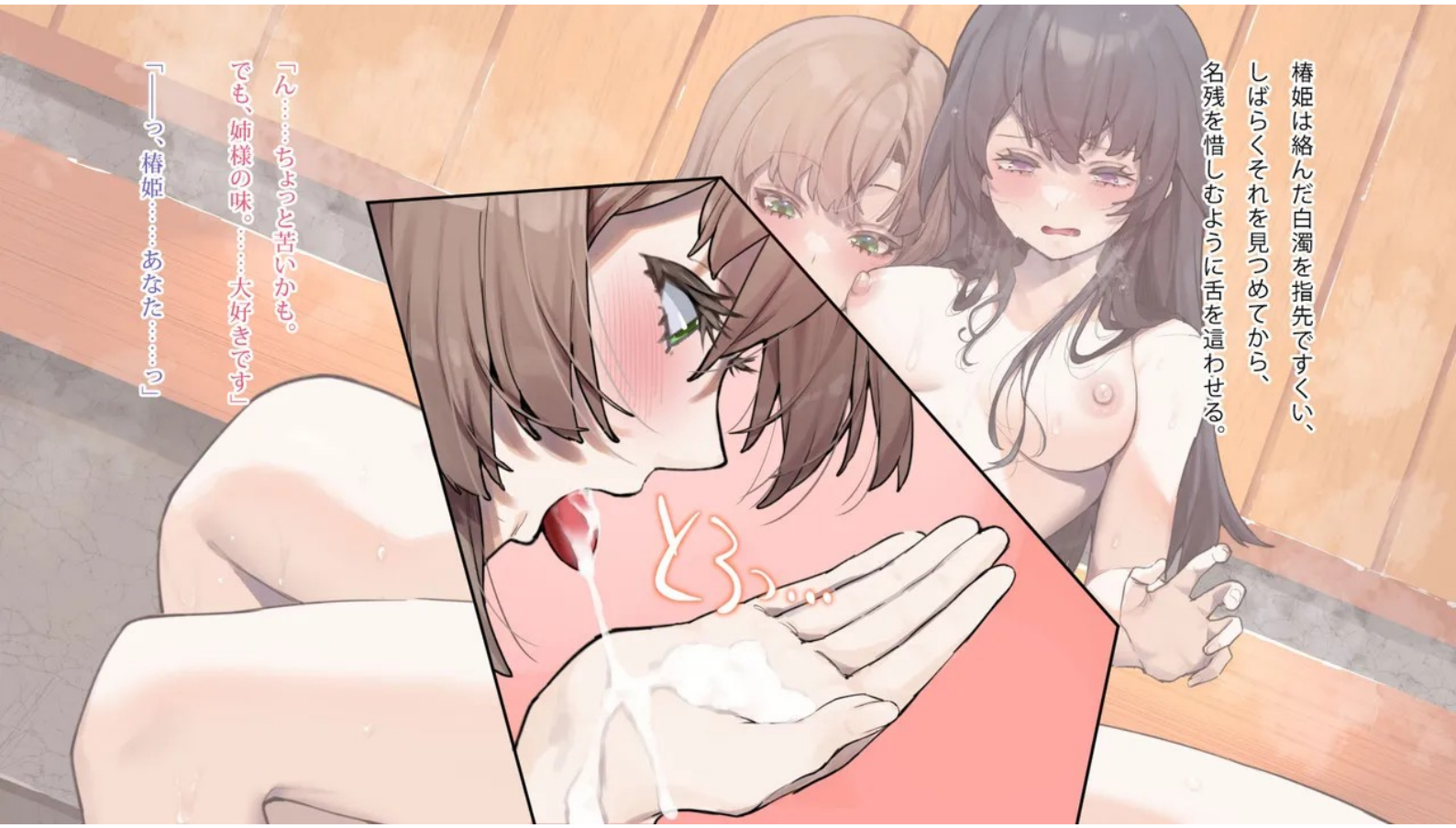

「やっ……椿姫っ、それ以上されたら……っ
もう……我慢できな……っ 出る、出ちゃうのぉ……っ！」
あっ あっ
はっ
はーっ
はーっ
ビクビクッ
しこしこ
ちゅっ
ちゅっ
「いいんです、出してください……っ
全部……わたしの手で、しっかり受けとめますから……っ」
澄桜の身体が小刻みに震える。
抑えていた熱が限界を越え、指の中で鼓動のように跳ねはじめた。
「あっ……い、イく、イっちゃう……出ちゃうぅぅっ！
あぁっ……もう、だめぇっ……!!」


熱い脈動が椿姫の手の中で爆ぜ、白濁がしぶきを上げる。
あぁぁっ…！
ビクンッ
びゅるるるるっ
びゅーっ
はーっ
はーっ
「あっ、あぁぁっ……出てる……っ！
椿姫の手の中でっ、熱いの……あぁぁっ……!!」
「すごい……姉様の……
止まらない……まだ出てますっ……」


「……はぁ、はぁ……こんなに……」
ああ…
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ビクンッ
どろぉ…
澄桜は椿姫の手に絡む熱を見て、頬を赤らめながら
肩をわずかに震わせる。
「こんなに出したんですね……私の手、姉様のでどろどろです」
「はぁ……ごめん……椿――あっ……」



役目を終えた象徴がすっと消え、代わりに残ったのは倦怠感と、
椿姫の手を汚してしまったという申し訳なさ。
「謝らないでください。
……言ったじゃないですか、私は嬉しいって。
姉様の力になれたこと……それに――」


椿姫は絡んだ白濁を指先ですくい、
しばらくそれを見つめてから、
名残を惜しむように舌を這わせる。
とろっ…
「ん……ちょっと苦いかも。
でも、姉様の味。……大好きです」
「――っ、椿姫……あなた……っ」



思わぬ行動に澄桜の胸がどくん、と跳ねる。
視線を外そうとしても、椿姫の舌先が脳裏に焼きついて離れない。

「本当はもっと……姉様のためにしたいんです。
どんなことでも、全部……」

言葉は穏やかで、それでいてどこまでも真っ直ぐだった。
椿姫の声には、優しさと欲が溶け合っている。
もっと触れたい、もっと尽くしたい——
でもそれを望む自分を、拒まないでいてほしいという願い。



澄桜は言葉を探すように、一瞬だけ視線を彷徨わせた。

答えてしまえば、椿姫を甘やかすだけじゃ済まなくなるかもしれない。

自分の欲を押しつけて、都合よく扱ってしまう……

そんなの、許せるはずがないのに。

「……っ、それは……こういうことは、本当に……好きな人と、するものだから……っ」

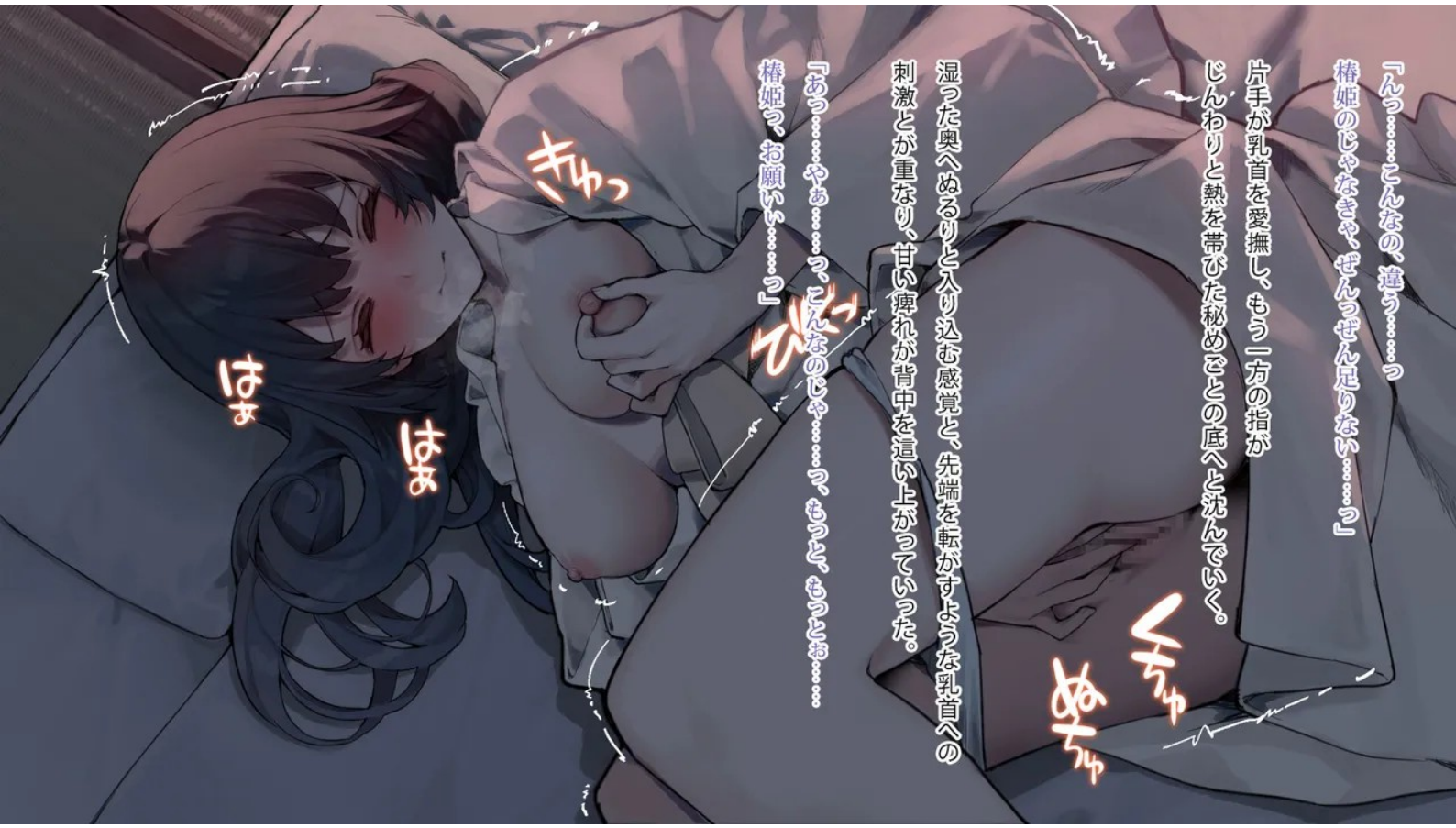
「もう、姉様ったら……」

その笑顔の奥にある切なさに気づきながらも――

澄桜は目を伏せるしかなかった。




夜も更け、静かな寝室の中、澄桜はひとり布団に横たわっていた。
洗い場での椿姫とのひとときが、まぶたの裏に鮮やかに浮かぶ。
彼女の指、彼女の声、ぬくもり――思い出すたび、
胸の奥がじんと熱を持って疼いてくる。
「椿姫……あなたを想うだけで……
私、もう……っ」
かすれた声で呟きながら、澄桜は自らの太腿にそっと手を這わせた。
指先がためらいがちに滑り、秘めた場所へと伸びていくと同時に、
もう片方の手がゆるやかに胸元へと動き――
乳房の先、薄く硬くなりかけた突起を摘まんだ瞬間、
彼女の身体がびくりと跳ねる。
スッ…
きゅっ
はぁ
はぁ


「んっ……こんなの、違う……っ
椿姫のじゃなきゃ、ぜんっぜん足りない……っ」
片手が乳首を愛撫し、もう一方の指が
じんわりと熱を帯びた秘めごとの底へと沈んでいく。
くちゅ
ぬちゅ
湿った奥へぬるりと入り込む感覚と、先端を転がすような乳首への
刺激とが重なり、甘い痺れが背中を這い上がっていった。
「あっ……やぁ……っ、こんなのじゃ……っ、もっと、もっとぉ……
椿姫っ、お願いぃ……っ」
きゅっ
はぁ
はぁ


呼吸は浅くなり、腰がわずかに浮くたび、
指が蜜の中をゆっくりと掻き回す。
乳首を撫でる指が、意識の中の椿姫の姿と重なっていく。
「んっ……椿姫……触れてほしい……っ、
声、聞かせて……あなたの……声……っ、椿姫い……」
熱に浮かされたように、澄桜は布団の中でひとり身をよじりながら、
想いの名を何度も呼んだ。
くりっ
はぁ
はぁ
くちゅ
ぬちゅ
ぐちゅ


指の動きが自然と早くなり、
秘所の奥からはぬめるような湿りが滲み出す。
どちらの指も止まらない——いや、止められなかった。
「だめ……止まらない……っ
椿姫のじゃないのにっ、私……ひとりで、こんな……っ」
ぐちゅ
ぬちゅ
ぐちゅ
指先が震えるたび、内側が甘く蠢き、
奥から何かがせり上がってくる。
吐息が乱れ、喉の奥がかすかに嗚咽めいた音を洩らす。
じわじわと、けれど抗えない速度で、
快楽が波のように押し寄せてくる——
くりっ
はぁ
はぁ
ビクビクッ


その瞬間、快感が頂点を越え、澄桜の身体が大きく反り返る。
「あっ……ああっ、椿姫っ……やぁっ……イっちゃう……っ、んんっ、あああ……っ!!」
体の奥から押し上げるように、熱い奔流が一気に放たれ――
澄桜は布団の中で身を震わせながら、
ひとしきり甘い絶頂に溺れた。
きゅうっ
あああっ
ビクビクッ
プシャアアッ


……けれど、その痺れが静かに引いていくと、
胸の奥にぽっかりと穴があくような、切ない感覚が残る。
「こんなことしても……
椿姫がしてくれなきゃ、私……全然足りない……っ」
かすれた声で呟きながら、澄桜は火照りの残る胸元に手を当てる。
頭に浮かんでくるのは、椿姫の笑顔――
愛おしくて、切なくて、涙が出そうだった。
はぁ
はぁ
くちゅ
ぬちゅ
ぐちゅ
びくっ



襖に背を預けたまま、椿姫はそっと目を伏せた。
襖越しに聞こえる、姉様の甘く震えた声。
そのひとつひとつが、肌に直接触れてくるようで――

「……姉様……そんな声……ひとりで、なんて……っ」

浴衣の裾をそっと捲り、太腿の間に手を差し入れる。
指先が肌に触れた瞬間、そこはもう湿っていて――
知らず知らずのうちに昂ぶっていた自分に、思わず小さく息を呑む。

「……そんなの、ずるいです……。
私だって、姉様のこと……こんなに……」

そっと撫でるたび、じんとした熱が身体の芯に染みていき、
澄桜の声に導かれるように指が沈んでいく。



「姉様の声だけで……
私、こんなに……なっちゃうなんて……っ」

潤んだ奥を指が掬うたび、腰から背中へ這い上がる甘い震えに、
椿姫は唇を噛んで目を細めた。

「私だって……姉様に触れたいのに……
そばにいてほしいのに……っ」

胸の奥からせり上がるのは、欲望と、ほんの少しの寂しさ。
どれほど想っても、どうしてこの距離が埋まらないのか――
そう問いかけたくなる衝動が、指の動きに重なっていく。

「お願いです……姉様……私のことを、ちゃんと見て……」

襖の向こうに寄せた想いを抱いたまま、
椿姫の指は静かに、その熱を刻み続けていた。



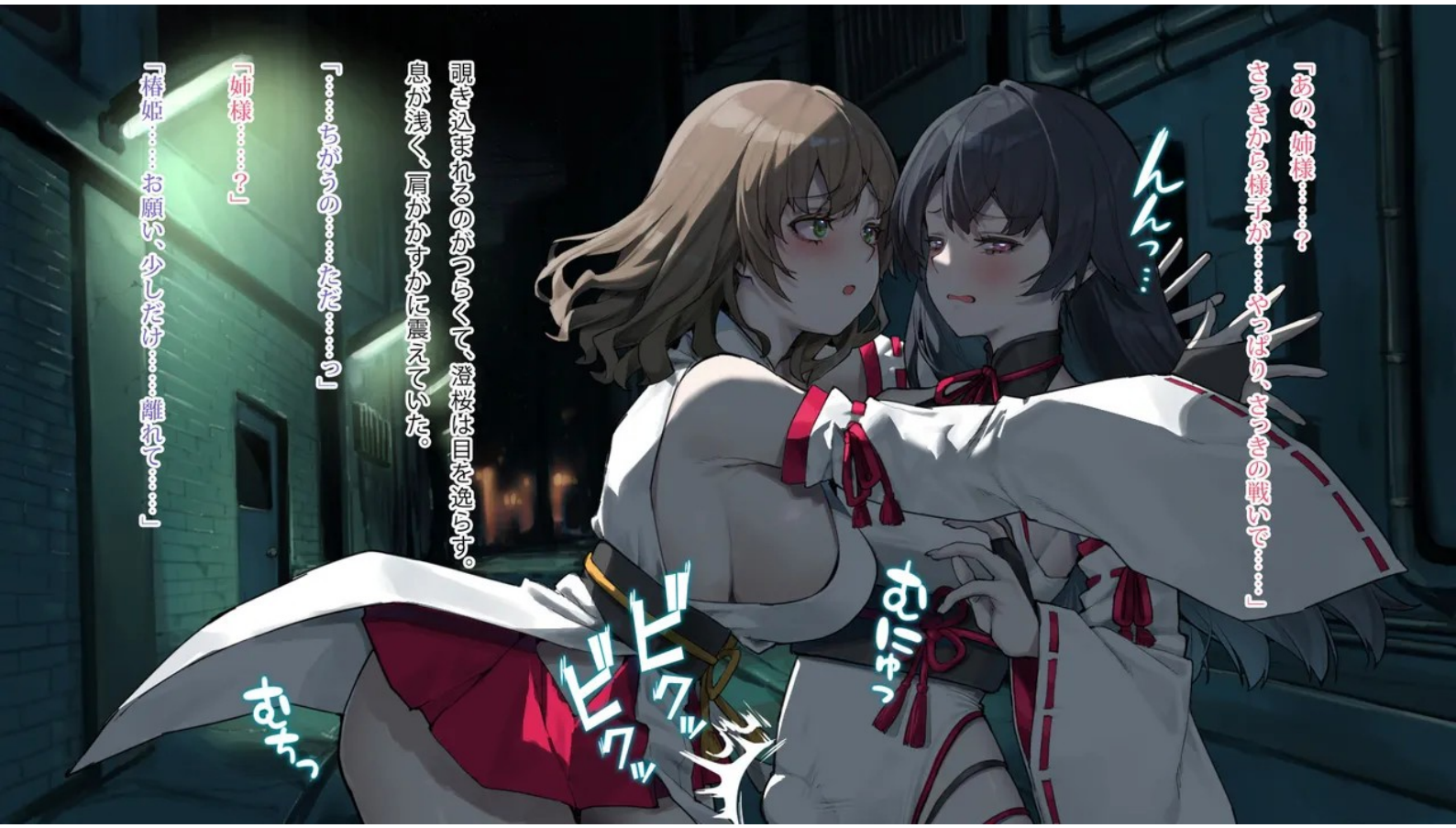

先日の戦いから数日後――。
二人は再び、妖魔討伐の任についていた。
「う……また出たんですね……。
しかも、前より……ずっと強い……！」
ギャキン
「……ええ。人々の持つ負の感情を餌に、力を蓄えたのね。
でも、これ以上、好きにさせるわけには……っ！」
澄桜が刀に霊力を込め斬り込む。

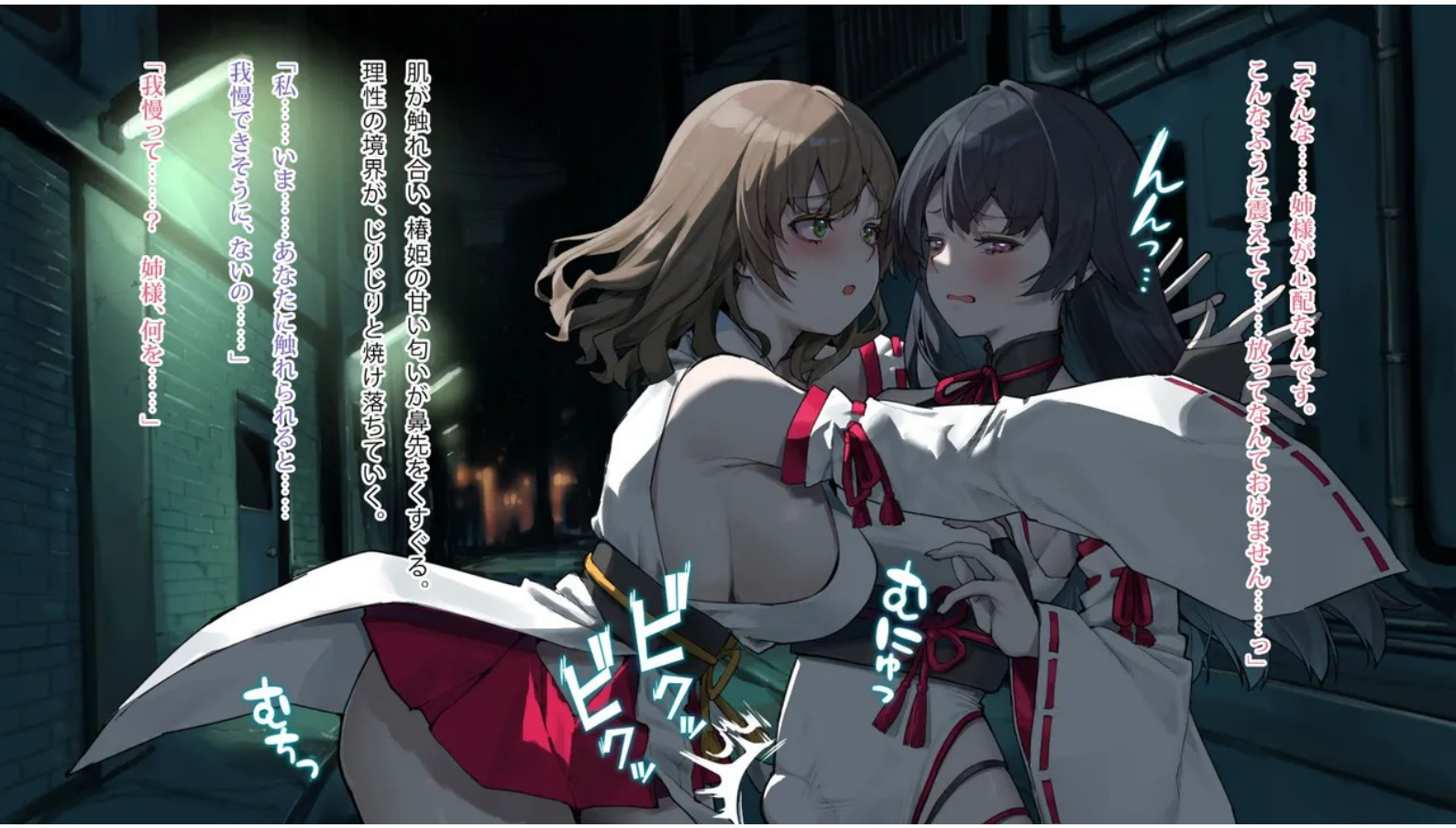

しかし、妖魔の黒い衝撃波が炸裂し、
霊撃が跳ね返されてしまう。
「――ぐうっ!!」
「うー　姉様っ、お怪我は……っ?!」
「……っ、かすっただけ……問題ないわ……！」
刀を構え直し、息を整える澄桜だが、顔には焦燥の色がにじむ。

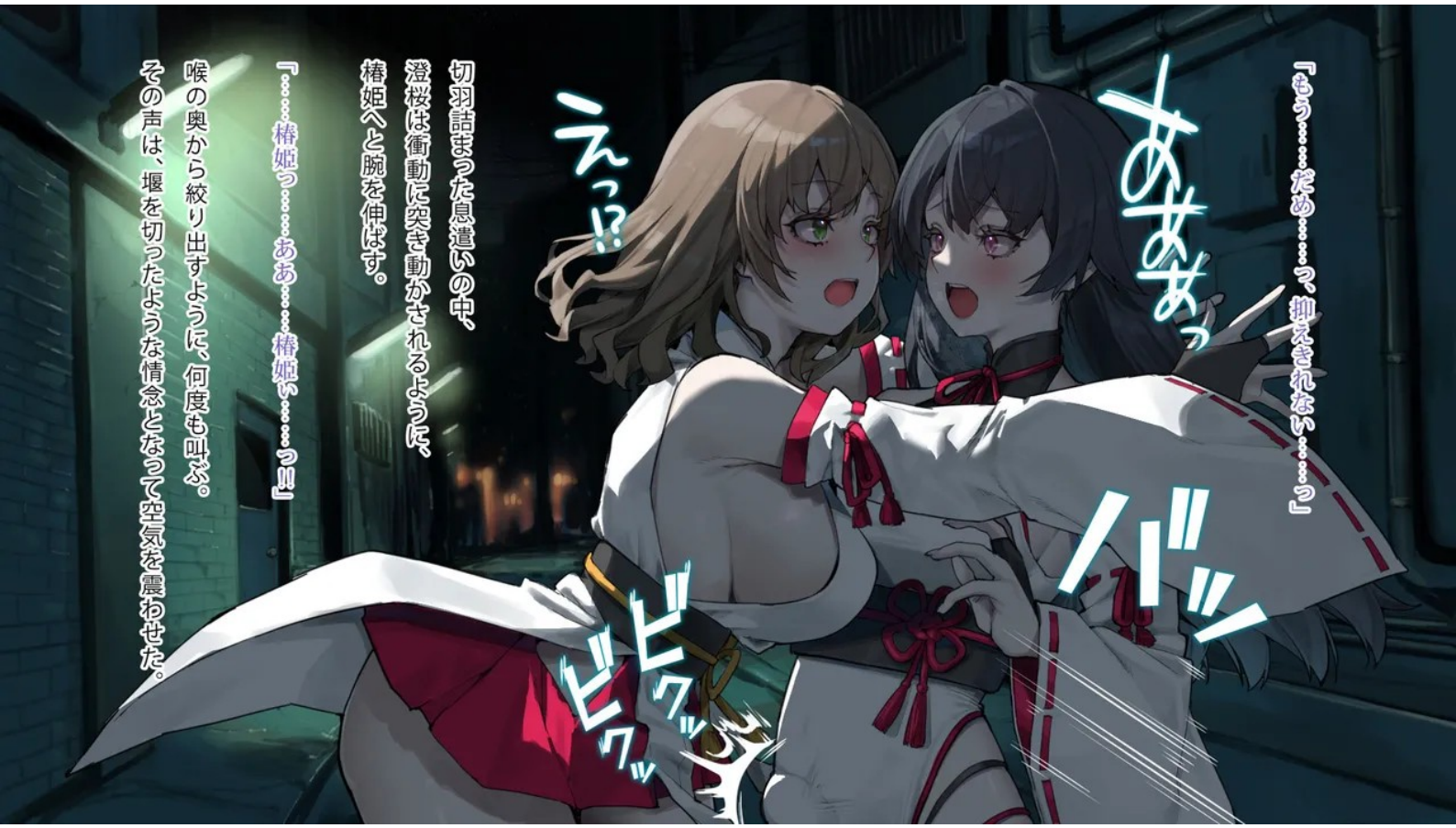

《ここまで妖魔の力が増しているなんて……
こうなったら奥義を使うしか……！
でも、そんなことをすれば――いや、もう迷ってる暇なんてない！》
心配そうな椿姫をよそに、澄桜は静かに覚悟を決める。


「我が血に宿りし戦神よ……いま一度、我にその威光を……！」
澄桜の身体が眩い光に包まれ、神々しいまでの神気を纏う。
空気が震え、妖魔が本能的に後退する。
澄桜の髪が銀色に染まり、膨大な霊力が顕現する。
ゴォッ
キィンッ
「破邪霊閃――、神威轟破ぅ――!!」
天を裂くような閃光が刀から解き放たれ、妖魔を直撃する。
眩い轟音と共に瘴気が一瞬で消し飛び、
妖魔は断末魔の叫びとともに霧散した。


妖魔は完全に霧散し、その気配すらも残っていない。
一瞬前の激しさが嘘のように、時間だけが穏やかに流れていく。
「姉様、やりましたねっ！
今回も……本当に、すごかったですっ！」
ガバッ
椿姫が嬉しそうに飛びついてくる。
潤んだ瞳に、憧れと熱が混じる。
「……え、ええ」
澄桜の返事は、どこかぎこちなかった。
笑わず、視線も泳いでいる。
むにゅっ
むちっ


「あの、姉様……？
さっきから様子が……やっぱり、さっきの戦いで……」
んんっ…
むにゅっ
ビクッ
ビクッ
むちっ
覗き込まれるのがつらくて、澄桜は目を逸らす。
息が浅く、肩がかすかに震えていた。
「……ちがうの……ただ……っ」
「姉様……？」
「椿姫……お願い、少しだけ……離れて……」

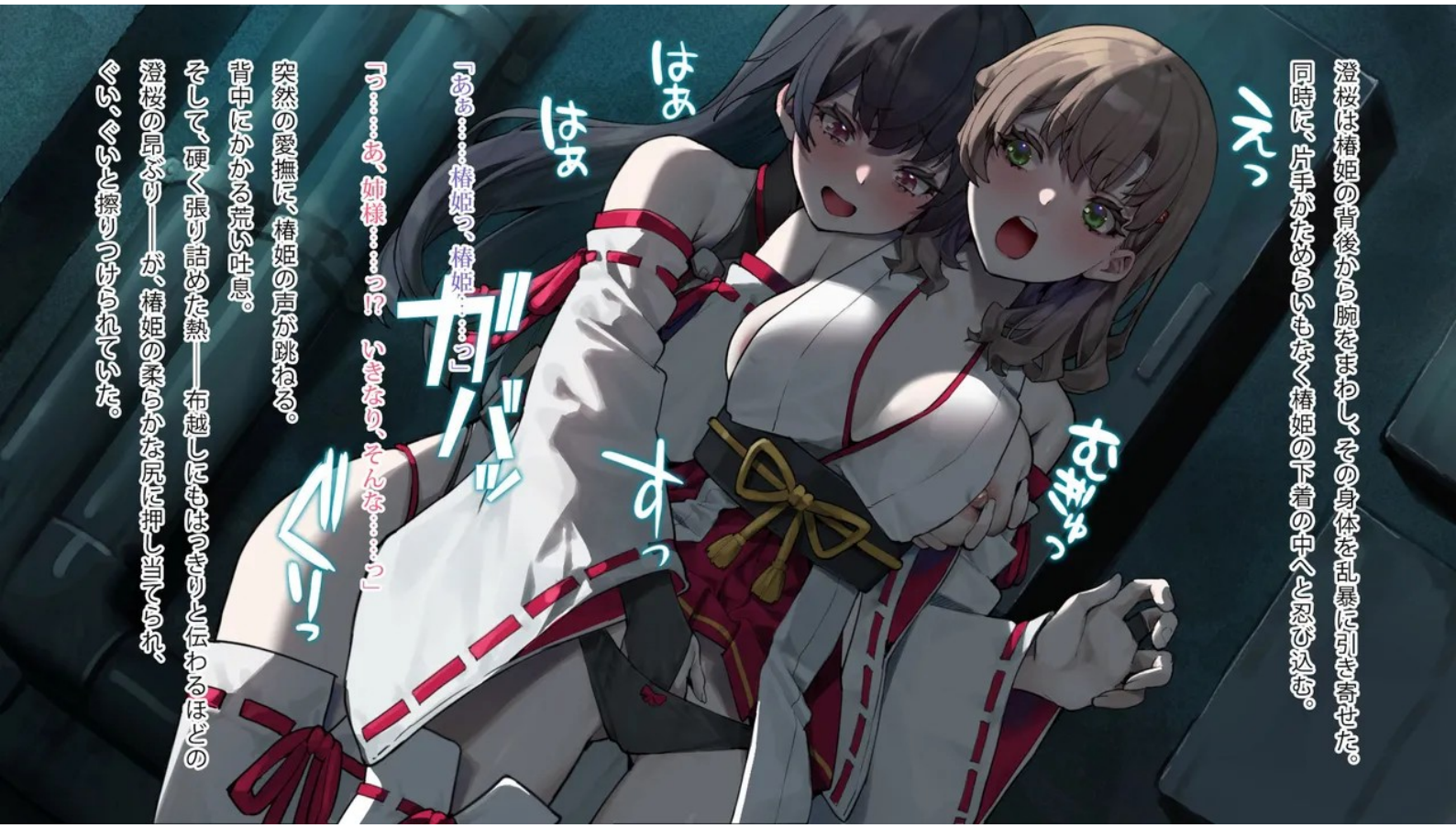

「そんな……姉様が心配なんです。
こんなふうに震えてて……放ってなんておけません……っ」
んんっ…
むにゅっ
ビクッ
ビクッ
むちっ
肌が触れ合い、椿姫の甘い匂いが鼻先をくすぐる。
理性の境界が、じりじりと焼け落ちていく。
「私……いま……あなたに触れられると……
我慢できそうに、ないの……」
「我慢って……？　姉様、何を……」

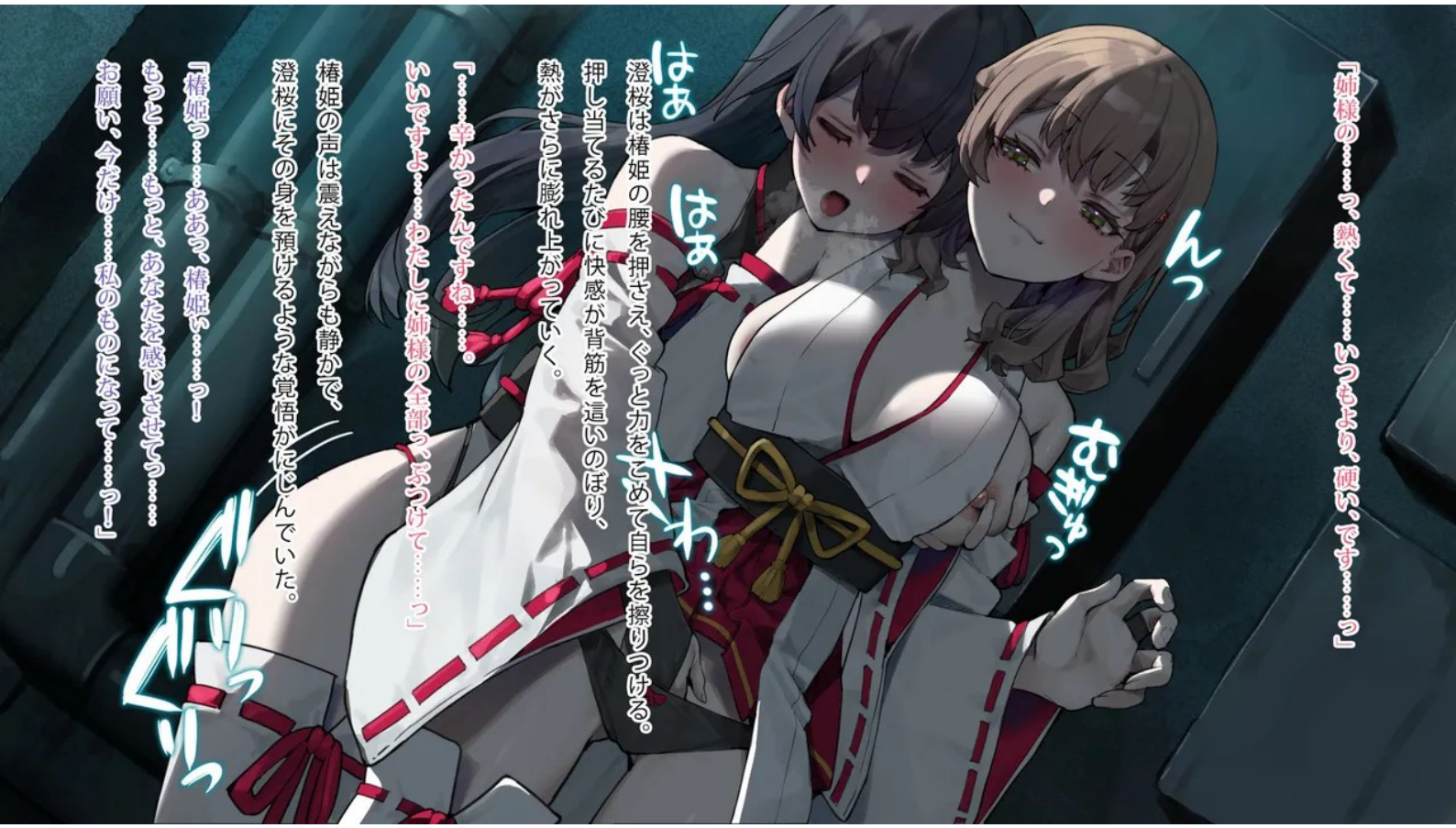


切羽詰まった息遣いの中、
澄桜は衝動に突き動かされるように、
椿姫へと腕を伸ばす。

「……椿姫っ……ああ……椿姫い……っ!!」

喉の奥から絞り出すように、何度も叫ぶ。
その声は、堰を切ったような情念となって空気を震わせた。


澄桜は椿姫の背後から腕をまわし、その身体を乱暴に引き寄せた。
同時に、片手がためらいもなく椿姫の下着の中へと忍び込む。
えっ
はぁ
はぁ
むぎゅっ
すっ
「あぁ……椿姫っ、椿姫……っ」
ガバッ
「っ……あ、姉様……っ!? いきなり、そんな……っ」
くりっ
突然の愛撫に、椿姫の声が跳ねる。
背中にかかる荒い吐息。
そして、硬く張り詰めた熱――布越しにもはっきりと伝わるほどの
澄桜の昂ぶり――が、椿姫の柔らかな尻に押し当てられ、
ぐい、ぐいと擦りつけられていた。



澄桜は椿姫の腰を押さえ、ぐっと力をこめて自らを擦りつける。
押し当てるたびに快感が背筋を這いのぼり、
熱がさらに膨れ上がっていく。

「……辛かったんですね……。
いいですよ……わたしに姉様の全部っ、ぶつけて……っ」

椿姫の声は震えながらも静かで、
澄桜にその身を預けるような覚悟がにじんでいた。

「椿姫っ……あぁっ、椿姫い……っ
もっと……もっと、あなたを感じさせてっ……
お願い、今だけ……私のものになって……っ」



そう呟きながら、澄桜は椿姫の上着の前を強引にはだけた。
白く透ける肌とたわわな乳房が、夜の空気の中に浮かび上がる。

「う、姉様う……、そんな、だめ……っ」

澄桜は片手で椿姫の乳房を深く包み込み、揉みしだく指先をゆっくりと這わせていく。
もう一方の手は、秘めた蕾の上をやさしくなぞっていた。
指先に伝わるのは、しっとりとした湿り気。
濡れ始めたばかりの柔らかさが、愛撫のたびに微かに震えていた。


「ああっ……姉様ぁ……っ、やぁっ、やだっ……
そこ、触られたら……声、我慢できなくなっちゃう……っ」
あんっ
あっ
はーっ
はーっ
むにゅっ
きゅむっ
くちゅ…
指先で反応を拾うたび、椿姫の身体が小さく痙攣する。
「椿姫……もう、濡れ始めて……
わたしのこと……感じてくれてるのね……嬉しい……」
「我慢しないで……お願い、椿姫の声……もっと聞かせて……」
「んっ……っ、姉様っ、やっ……
ひゃうっ、姉様……っ、んっ、姉様ぁ……っ」
「あぁ……そんなに可愛く乱れて……
もうだめ、わたし……抑えきれなくなっちゃう……
もっと、もっとあなたを感じたい……っ」



澄桜は囁くように、椿姫の耳元でそっと言葉を重ねる。
その意識は、椿姫の身体を求めることにすっかり夢中になっていた。

椿姫の秘所は澄桜の指を拒まぬほどにほぐれ、
肌には玉のような汗が浮かび始めていた。

「椿姫っ……！　私っ、もう……我慢できない……！」

そう言うと、澄桜はその場で椿姫を押し倒した。


「椿姫……ごめん……もう、止まれないの……」
澄桜は仰向けになった椿姫に馬乗りになり、
たわわに実った胸の谷間へ猛る熱を沈めた。
ぎゅむっ
ビクッ
ぎゅむっ
「……っ、姉様……！
さっきよりも硬くて……っ、熱い……」
驚きに目を見張りながらも、椿姫は身を引かず、
その胸で澄桜を受け止める。
肌に押しつけられたそれは、先ほどよりも一層、
灼けるような熱を帯びていた。
はぁ
はぁ


谷間に押しつけたまま、澄桜は胸の感触を味わうように、
腰をゆっくりと動かし始める。
はぁ
はぁ
むにゅっ
むにゅっ
「……椿姫の胸……すべすべで……あったかくて……っ、
はぁ……気持ちいいっ……止まれなく、なるぅ……っ」
ビクッ
掌で乳房を揉みしだきながら竿を柔肌と擦れ合わせるたび、
彼女の背筋を電流のような刺激が駆け上る。
「姉様……そんなに苦しかったんですね……」
小さく息を漏らしながら、椿姫は澄桜の熱を胸の間で感じとる。
はぁ
はぁ


「……私の胸で……気持ちよくなってほしい、です……」
はぁ
はぁ
むにゅっ
むにゅっ
ビクビクッ
潤んだ瞳で見上げながら、優しく咬く。
そして、谷間に収まる先端が跳ねるたび、その熱がじんわりと伝わってきて、椿姫の身体を静かに火照らせていった。
「それじゃあ……私も……」
はーっ
はーっ


そう言って、そっと舌を突き出す。
尖らせた舌先が、先端にぴたりと触れた。
はぁ
はぁ
むにゅっ
ぺろっ
ビクビクッ!!
むにゅっ
「あっ……椿姫……あなたの舌、ざらざらして……
気持ちよくてたまらない……っ」
震える声をこぼしながら、澄桜は腰をわずかに揺らす。
「ふふ……これが姉様の味、なんですね……」
「……でも……舌だけじゃ、もう足りないの……
椿姫……お願いっ……もっと……もっと感じさせて……っ」
はーっ
はーっ



椿姫は黙って唇を開き、澄桜の熱を咥えこむ。
ぬくもりと湿り気が、澄桜をじわじわと包み込んでいき、
頬の内側で優しく締めつけると、澄桜の身体がびくんと震えた。

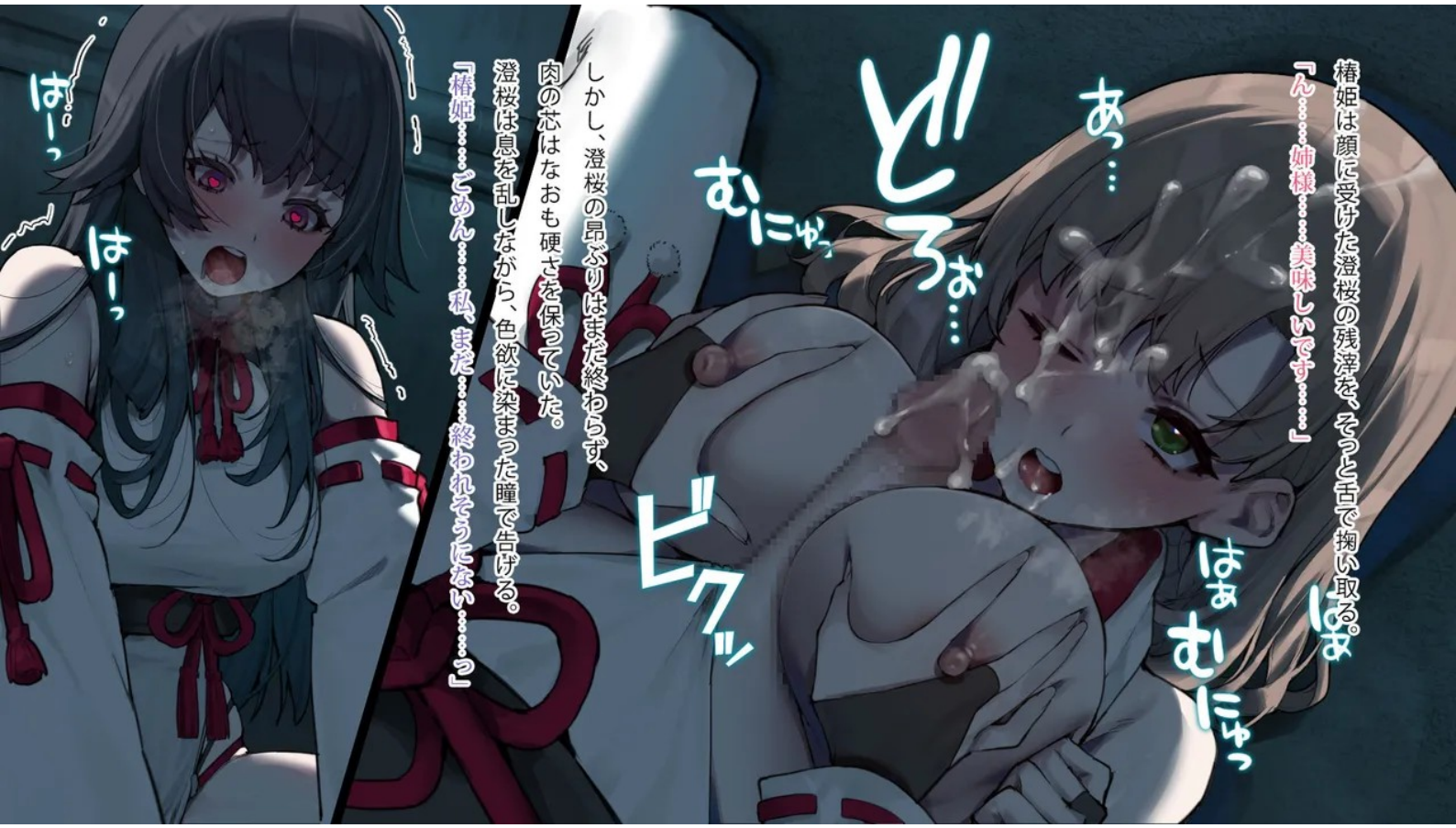
「ああっ……椿姫……椿姫の口……あったかくて……
優しくて……っ、だめ、気持ちよすぎて……!!」

口内に甘く沈む感触。
椿姫の舌がゆっくりと先端を転がすたび、澄桜の喘ぎが深くなる。
時折、裏側のやわらかい面で包み込むように撫でたり、
――強く吸い上げることで、澄桜の身体を更なる快感へ導いていく。



澄桜はたまらず、ひときわ深く腰を沈め、その動きを速めていく。
甘い摩擦が繰り返されるたび、椿姫の胸元に伝わる刺激も大きくなり、澄桜の限界が近づいていることがわかった。
「椿姫……あぁっ、もう……もうすぐなのっ……！
お願い、あなたの顔に……!!」
椿姫は咥えたまま、わずかに頷く。
そのまま唇を離し、熱を受ける覚悟をその瞳に浮かべる。
「……姉様……出してください……私に……かけて……」


「はぁっ、あっ……椿姫っ……椿姫い……っ！
出る、出ちゃうぅ……っ！　全部……あなたにぃ……っ!!」
あっ
びゅくっ
びゅるるるっ
ビクンッ!!
澄桜は堪えきれず、震える声とともに、
椿姫の顔へ熱い迸りを解き放った。
「っ……ああ……姉様の……っ、熱くて……どろどろで……っ」
熱い飛沫が椿姫の額から頬へ、唇にまで滴る。
はあぁっ…！


椿姫は顔に受けた澄桜の残滓を、そっと舌で掬い取る。
「ん……姉様……美味しいです……」
あっ…
どろぉ…
むにゅっ
ビクッ
はぁ
むにゅっ
しかし、澄桜の昂ぶりはまだ終わらず、
肉の芯はなおも硬さを保っていた。
澄桜は息を乱しながら、色欲に染まった瞳で告げる。
「椿姫……ごめん……私、まだ……終われそうにない……っ」
はーっ
はーっ


澄桜は椿姫の太ももに手を添え、
柔らかな脚を折りたたむように持ち上げる。
開かれた身体――あられもないその体勢に椿姫は身を縮め、
頬を紅潮させた。
「やっ……姉様っ、……こんな格好、恥ずかしすぎます……っ」
羞恥に濡れた声が震えるが、抵抗の気配はない。
「……ごめんなさい、椿姫。でも……私、もう……っ」
澄桜の声がかすれ、喉奥で熱がくすぶる。
「椿姫が、あなたが欲しくて……もう、止まれないの……っ！」


「う……椿姫……もう、無理……っ」
澄桜は息を荒げながら、そのまま重ねるように身体を沈めた。
「あ、あぁっ……やっ……姉様っ……!!」
ズンッ
ずぷぷっ
はぁあっ……!
椿姫の声が裏返る。
驚きと戸惑いに混じって、抑えきれない熱が滲んでいた。
ビクンッ!
「椿姫……許してっ……もう、触れてるだけじゃ我慢できない……っ
あなたの奥まで、感じさせてっ……!!」
熱を帯びた感触が、澄桜を迎え入れていく。
甘くとろけるような衝撃が、澄桜の背筋を駆け上がった。
あぁあっ

「あ、ああっ……な、なにこれ……っ
椿姫の中……熱くて、やわらかくて……っ
すごい、締めつけて……っ」
「んんっ……っ、あっ……姉様あ……奥で響いて……
身体が熱い、ですっ」
ビクビクッ
ギチッ
きちっ
はぁ
はぁ
「すごい……っ 椿姫に包まれてるっ……
奥の奥まできゅって……絡みついてくるぅ……っ」
はぁ
「ふあっ……っ、姉様が……
私の中で気持ちよくなってるの、分かって……嬉しい、です……っ」
「こんなにも、奥までぴったり……っ
あたたかくて……気持ちよすぎて……もう、じっとなんてっ……」

「……だめ……もう我慢できない……っ　動くから……っ♡」
澄桜の腰が激しく打ちつけられ、湿った音がふたりの間に弾ける。
「ひあっ……あっ、んんっ……姉様のが……
やさしく、でも……奥まで響いて、きます……っ」
パンッ
ずちゅっ
はーっ
パンッ
ずちゅっ
はーっ
「そんな声出されたら、私っ……お願い、もっと聞かせてっ！
あ、ああぁ……っ、椿姫いっ♡」
ビクンッ
「んあっ……っ、だ、だめっ……でも……感じすぎて……っ、
奥が、熱くなっちゃう……っ」
あぁあっ
「奥が震えてるの、わかるわ……っ　きゅって吸いついて……っ
深くまで感じさせて……椿姫……っ♡」


「はぁっ、んんっ……椿姫っ……っ、もう、だめ……っ
出したい……っ　あなたの奥に……全部、出したいのぉ……っ！」
パンパンパン
ずちゅっ
ずちゅっ
はーっ
はーっ
熱の波がせり上がり、澄桜の腰がぴくりと跳ねる。
息が詰まりそうなほどの衝動が、腹の奥から突き上げていた。
「んんっ……っ、姉様ぁ……っ、来て……っ
奥で、姉様の受け止めます、から……全部、ください……っ！」
ビクンッ
あんっ
あんっ
「はぁっ、椿姫っ……っ、出すっ……あなたの奥で……っ！
受け止めて……お願い……っ！
あぁっ、椿姫……椿姫いっ……っ!!」


「あっ……ああああっ……椿姫っ……椿姫い……っ！
んあっ……あ、ああああ……っ！」
ビクンッ
ぴゅ
ぴゅるるっ
どくっどくっ
ああっ…！
こみ上げた熱がついに溢れ、澄桜の身体が大きく震える。
吐き出すたび、椿姫の奥に甘い痺れが広がっていく。
「ひあっ、んんっ……あっ……あったかい……っ
姉様のが……奥に、どくどくって……きてます……っ！」
身体の奥で波打つような感覚に、二人の境界が溶けていく。
ビクビクッ
ふあぁっ…！



絶頂の余波が静かに引いていく中、澄桜は静かに息を整えながら、
椿姫の奥の熱を感じていた。

「あぁ……椿姫……こうしてあなたに包まれてるだけで……
あたたかくて……落ち着くのに……」

澄桜の言葉に椿姫は目を細め、小さく息を吐いて微笑む。
頬は上気し、その表情には満たされた色が滲んでいる。

その顔を見た瞬間、澄桜の胸にふたたび熱が灯る。
椿姫の奥に残る余熱が、消えかけた衝動をそっと焚きつけていた。

「……っ、ごめんなさい、椿姫……」


澄桜の呟きとともに、椿姫はそっと視線を上げた。
微かに震える指先と、奥底からせり上がる熱――
澄桜の中に再び火が灯ったことを、肌で感じ取っていた。
「姉様……？」
問いかける声は柔らかく、怯えではなく、
寄り添うためのものだった。
ビクビクッ
はーっ
はーっ
どろぉ…
「……まだ、足りないの。
椿姫を……もっと感じたい……っ
奥の奥まで、あなたを……っ」
椿姫は目を細め、小さくうなずいた。
「大丈夫です、姉様。私……何度だって、姉様を受け止めますから」
ビクビクッ
はぁ
はぁ
その声音には揺るぎない覚悟と、
澄桜への深い想いが込められていた。


澄桜の腰が勢いよく沈み込み、絡みつく熱を押し広げながら、
欲望のままに椿姫を貫いていく。
「あぁっ……椿姫……っ
やっぱり……奥、あたたかくて……とろとろで……っ
気持ちよすぎるっ……椿姫……っ！」
ずちゅっ
ずちゅっ
はーっ
はーっ
「姉様っ……そんなに強くされたら……っ
奥まで響いて……っ、私、また……っ
「出したいっ、また出したいの……っ
あなたの奥が、私のでいっぱいになるまで……っ！」
ビクンッ
あぁっ…
澄桜の腰が打ちつけられるたび、
ぐちゅりと濡れた音が弾け、椿姫の身体が甘く跳ねる。
二人の熱がさらに深く重なっていく。


「椿姫っ……また、きちゃう……っ　もう、私……っ！」
澄桜の腰が激しく上下し、椿姫の奥まで容赦なく突き入れる。
再び熱がこみ上げ、理性が焦げつくほどの衝動に変わっていく。
パンパンパン
ずちゅっ
ずちゅっ
はーっ
はーっ
あぁっ…
ビクンッ
「んっ、あっ……姉様っ……っ
また……っ、また中に……出してください……っ！」
「出るっ、出ちゃう……っ　ああっ、椿姫っ……！
もう一度、受け止めてっ……お願いっ、あ、あぁぁ……っ!!」
澄桜の全身がぴんと張りつめ、吐息が短く詰まる。

「あっ、あぁあっ……っ！　椿姫っ……っ、出るっ……
イくっ、イくイくっ、イッくぅうぅうっ!!」
澄桜の腰が深く沈み込み、
溢れる熱が椿姫の奥へと躊躇なく放たれていく。
ビクンッ
ぴゅるるるっ
ぴゅくぴゅくっ
あぁあっ!!
ひぁっ..!
ビクビクッ
「ひっ……んんっ……あぁっ、姉様のが……っ、どくどくって……
また……いっぱいい……っ！」
椿姫の奥で脈打ちながら流れ込む熱が、
柔らかな壁を震わせて広がっていく。

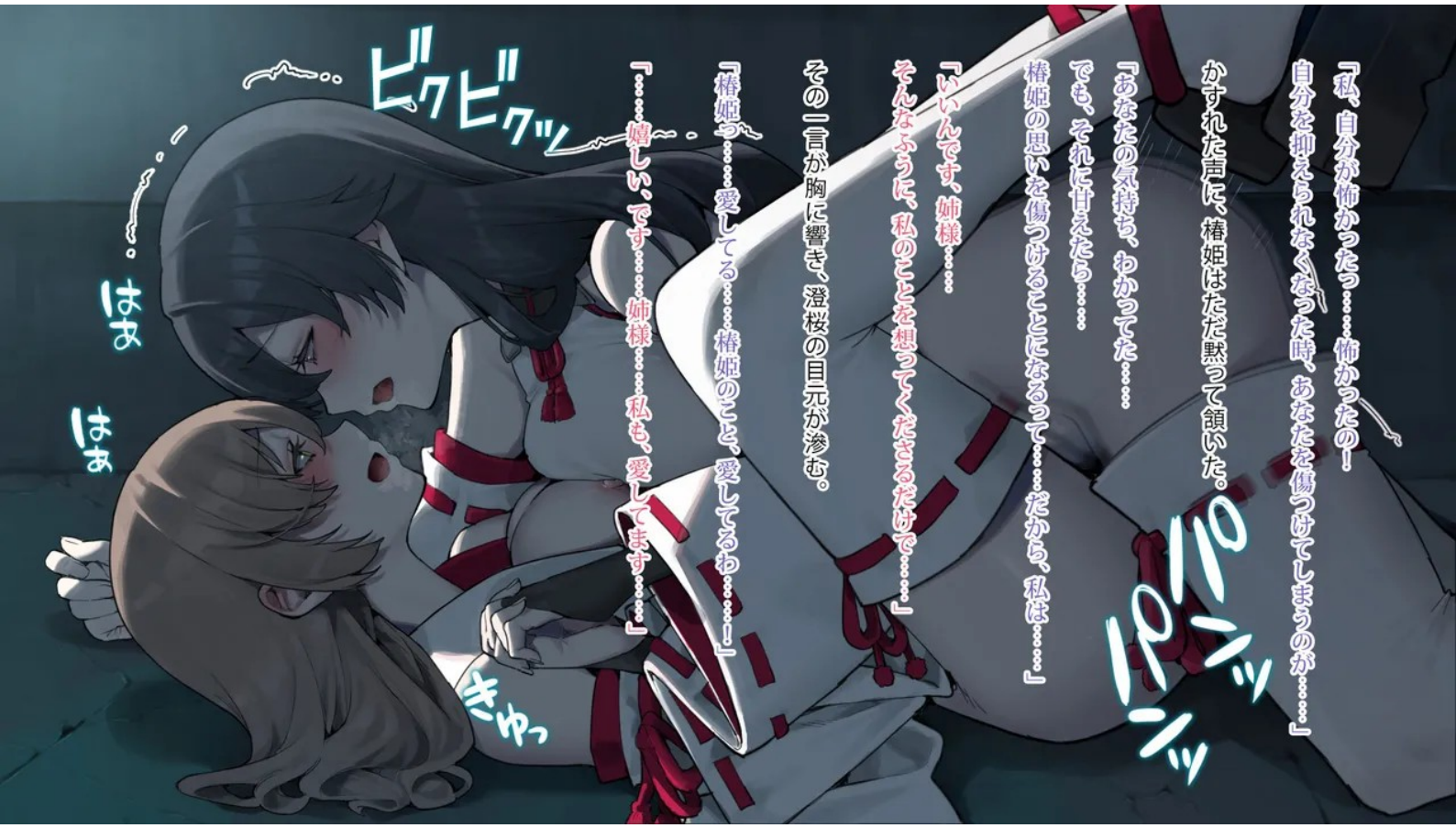

澄桜の腰が押しつけられたまま、脈打つ熱が止まることなく
椿姫の奥へと注がれていく。
「あぁっ……、まだ、姉様のが……中に、たくさんっ、きてるぅ……っ」
椿姫の声は甘く震え、頬を染めながら快感に身をゆだねていた。
「椿姫……っ、ごめん……止まらないの……っ
まだ……出る……っ！」
ぴゅるるるっ
ぴゅくぴゅくっ
ひぁっ…！
あぁぁっ…！
唸るような澄桜の声は、まだ収まらない衝動に震えている。
椿姫の奥深くでは、なおも澄桜の熱が溢れ続け、
二人を繋ぐ結び目がじんと甘く痺れていた。
びゅくっびゅうぅ〜〜っ


「あ……っ」
最後の脈動が収まった瞬間、澄桜の全身から熱が抜けた。
押し寄せる快感に飲まれていた心が、
無理やり現実へと引き戻されていく。
ビクビクッ
はぁ
はぁ
どろぉ…
椿姫のやわらかな吐息、満ち足りた顔。
その幸福があまりに眩しくて、澄桜は息を詰めた。
「椿姫……私……こんな形で、あなたを……」
触れたままの肌はあたたかいのに、
それが胸の奥を静かに締めつけてくる。
ビクビクッ
はぁ
はぁ


「……姉様が私を求めてくれたこと、嬉しかったです」
椿姫は潤んだ目で微笑みながら、澄桜の頬にそっと手を伸ばす。
「だって私、姉様に触れてもらえるなら……
それだけで、幸せなんです」
ビクビクッ
はぁ
はぁ
どろぉ…
震えるように告げられたその言葉に、
澄桜の唇がわずかに揺れる。
「……椿姫……」
呼びかけに応えるように、椿姫はそっと笑みを浮かべた。
ビクビクッ
はぁ
はぁ
「ねえ、姉様。もう一度……私を抱いてくれませんか？
今度は……ちゃんと、姉様の気持ちのままで」


「ほら……こうしたら、姉様の顔がよく見えます。
きてください、姉様……」
椿姫が仰向けになり、
脚を開いて澄桜を迎え入れる体勢を取る。
その姿に息を呑みながらも、
澄桜は膝をつき、そっと身を重ねた。
「私、椿姫に甘えてばかりね……
だから、ちゃんと抱きしめさせて……」
熱を帯びた先端が椿姫の奥へと触れた瞬間、
抑えていた感情が胸の奥から溢れそうになった。
ズッ…
ぬちゅっ…
きゅっ


「姉様、ゆっくりでいいですから……」
椿妃の声が、澄桜の揺れる心をそっと支える。
「私、姉様の全部を受け止めます。
だから……そのままの姉様でいてください」
澄桜はそっと目を伏せ、小さく息を吐くと――
静かに、腰をゆらし始めた。
濡れた熱が絡みつき、進むたびに甘く引き留められる。
その感触に、胸の奥がきゅっと疼いた。
ビクッ
はぁ
はぁ
ずちゅっ
ぬちゅっ
きゅっ


「私、自分が怖かったっ……怖かったの！
自分を抑えられなくなった時、あなたを傷つけてしまうのが……」
かすれた声に、椿姫はただ黙って頷いた。
「あなたの気持ち、わかってた……
でも、それに甘えたら……
椿姫の思いを傷つけることになるって……だから、私は……」
「いいんです、姉様……
そんなふうに、私のことを想ってくださるだけで……」
その一言が胸に響き、澄桜の目元が滲む。
「椿姫っ……愛してる……椿姫のこと、愛してるわ……！」
「……嬉しい、です……姉様……私も、愛してます……」
パンッパンッ
ビクビクッ
はぁ
はぁ
きゅっ


「椿姫……！」
「姉様……！」
呼び合う声が重なり、
ふたりは衝き動かされるように唇を重ねた。
「ん……椿姫……っ」
「姉様……んうっ……」
触れ合う舌先に、募る想いが溶けていく。
熱を込めた吐息が混ざり合い、
唇と心が静かに重なっていった。
ビクッ
んっ…
ちゅっ…
パンッ
パンッ
きゅっ


キスは深く、貪るように熱を帯びていく。
濡れた吐息と、名を呼ぶ声が交互に響いた。
「椿姫……っ、んっ……椿姫……」
「姉様……ん、んっ……姉様……」
唇を離しても、すぐに求めるように触れ合う。
もどかしいほどの愛しさが、唇の間に幾度も灯った。
ビクビクッ
ちゅっ…
れろっ…
ぎゅうっ
パンッパンッ


「ごめんっ……椿姫、私っ、もう……っ」
澄桜の動きが次第に速まり、
こみ上げる衝動が抑えきれずに溢れていく。
「んっ……はぁ……姉様っ……」
椿姫の声も甘く掠れ、熱に揺らぐ瞳が潤む。
重なり合うたび、奥に届く熱が増していき、
肌と心がとろけ合う。
「……止まらないの……椿姫……っ」
ビクンッ
ちゅっ…
れろっ…
ぎゅうっ
パンッ
パンッ


「姉様……私の中に、出してください……」
椿姫はキスの合間に唇を離し、
澄桜の頬に吐息まじりの声を零す。
脚を絡めるようにして、
重なった熱をさらに深く迎え入れていく。
「んっ……奥まで……もっと、感じていたいんです……
姉様を……全部……っ」
「椿姫……あなた……っ」
澄桜の吐息も、熱を帯びて震えた。
「……私、姉様の想いで、奥まで染められたい……っ」
ビクビクッ
ぎゅっ
ぎゅうっ
ちゅっ…
れろっ…


「椿姫っ……椿姫いっ……！　イくっ……あぁっ……!!」
澄桜の声が弾けるように響き、
同時に体の奥で熱が脈打った。
溢れた想いが椿姫の奥深くへと注ぎ込まれ、
ふたりは深く繋がる。
「んんっ……あぁっ……姉様ぁっ……！」
椿姫もその熱に包まれ、
息を詰まらせるように震えた。
「姉様の熱いのがっ……わたしの中にっ……きてるぅ……っ!!」
ビクンッ
あぁっ！
はぁっ！
びゅうっ
びゅるるっ
びゅくっ


昂ぶりは収まらず、
澄桜の熱が幾度も椿姫の奥へと
流れ込んでいく。
「椿姫っ、椿姫っ……止まらない……っ！
あなたの中が、気持ちよすぎるっ……」
「ああっ、姉様ぁ……！　嬉しいです、姉様のっ……
もっと私の中に……いっぱい……っ」
椿姫が脚を絡め、声を震わせる。
「椿姫い……！　あぁ……っ、椿姫……!!」
ふたりの熱は重なり続け、
名前を呼び合うたび、甘く深く絡みあった。
びゅうぅぅっ
びゅるるっ
びゅくっ
ビクンッ
んんっ…
ぎゅうっ
ちゅうっ…


ようやく熱が静まり、
名残を確かめ合うように再び唇が触れ合う。
「んっ……椿姫……んんっ……」
「ふぁ……姉様ぁ……ん、あ……っ」
小さく身を揺らしながら、椿姫がふと気づく。
「……姉様の、なくなっちゃいましたね……」
少しだけ寂しそうに、
名残を惜しむような声でつぶやいた。
びくっ
んんっ…
ちゅっ…
ぎゅっ
ぎゅうっ
どろぉ…

ふと――澄桜の眉がわずかに寄る。
「……椿姫？　これ……もしかして……」
「？　どうしたんですか、姉様……？」
澄桜は戸惑いの滲む瞳をじっと見つめ、
そっと頬に触れると、小さく首をかしげてから身体を離した。
どろぉ…
ぎゅっ
きゅっ
…？


「え、ええええ……っ?!」
澄桜が身を離すと、椿姫の身体に起きた変化が露わになる。
「つ、椿姫……?」
ええっ!?
えっ
びくんっ
驚きに息を呑んだ澄桜の視線が、椿姫の脚の間に釘付けになる。
そこには、あり得ないはずのもの――
彼女の股間から、硬く脈打つ昂りが生えていた。
「な、なんで……っ、えっ……これ、私に……!?」
椿姫も自分の股間を見て顔を真っ赤にしながら、
あたふたと視線を彷徨わせた。
「ど、どうしましょう、姉様っ……わた、私……どうなっちゃったの!?」



澄桜は内心動揺しつつも、冷静を装いながら口を開く。

「おそらく……私の霊力をあれだけ深く受けたことで、戦神様の力が一時的に宿って……その影響で、あなたの身体にも……」

言いながら、自分の言葉に目を伏せる。

椿姫は、まだ事態を理解しきれずに戸惑っていたが、澄桜にはわかっていた。

自らの経験から――その昂ぶりが、どれほど苦しいものか。

「椿姫……ごめんなさい。これは……私がなんとかするわ」

「……えっ……えぇっ!?　ね、姉様……!?」


澄桜は、椿姫の昂ぶりにそっと唇を寄せる。
「あっ……姉様……だ、だめぇ……っ」
「椿姫の……こんなに熱く、硬く張り詰めて……」
はぁ
あぁぁっ！
はぁ
んちゅっ
ビクビクッ
びくんっ
慎重にその先端へ舌を這わせる。
淡く、少しだけ塩気のある、椿姫の身体の味。
「ん……椿姫の味、こんな感じなのね……」
「そん、なぁ……そんなの、言わないでください……っ」
羞恥に揺れる声を受け止めながら、
澄桜は、かつて自分がされたことを思い出すように、
ゆっくりと、丁寧に舌を這わせていく。



椿姫の震えが唇越しに伝わる。

「あっ……ん、姉様……だ、だめっ……そんなの……っ」

澄桜の口内に包まれた昂りが、ますます硬さを増していく。

拒む言葉とは裏腹に、身体は確かに応えていた。

「ん……椿姫、気持ちいいのね……」

深く咥え込みながら、澄桜は舌先で幾度も優しく愛撫する。

「はぁっ……んんっ……姉様ぁ……

やわらかくて、あたたかくて……っ」

椿姫の声は甘く掠れ、羞じらいながらも、

澄桜の奉仕に身を預けていった。



澄桜の耳に届くのは、椿姫の途切れがちな呼吸と、震える吐息。

「椿姫のここ……びくびくして……んっ、もう……限界なのね……」

「は、はいぃっ……っ、中から……熱いの、きちゃいそうで……っ」

その言葉に澄桜は、咥えたまま頭の動きを徐々に速め、奥まで何度も出入りするように奉仕を深めていく。

「あっ……あぁっ、もう……もうだめぇっ……っ！」

「んっ、椿姫……口の中に、出してもいいのよ。私が全部、受け止めるから……っ」

椿姫の息が荒くなり、指先にぎゅっと力がこもる。

抑えきれない衝動が身体を震わせ、

熱が一気に駆け上がっていくのが分かった。

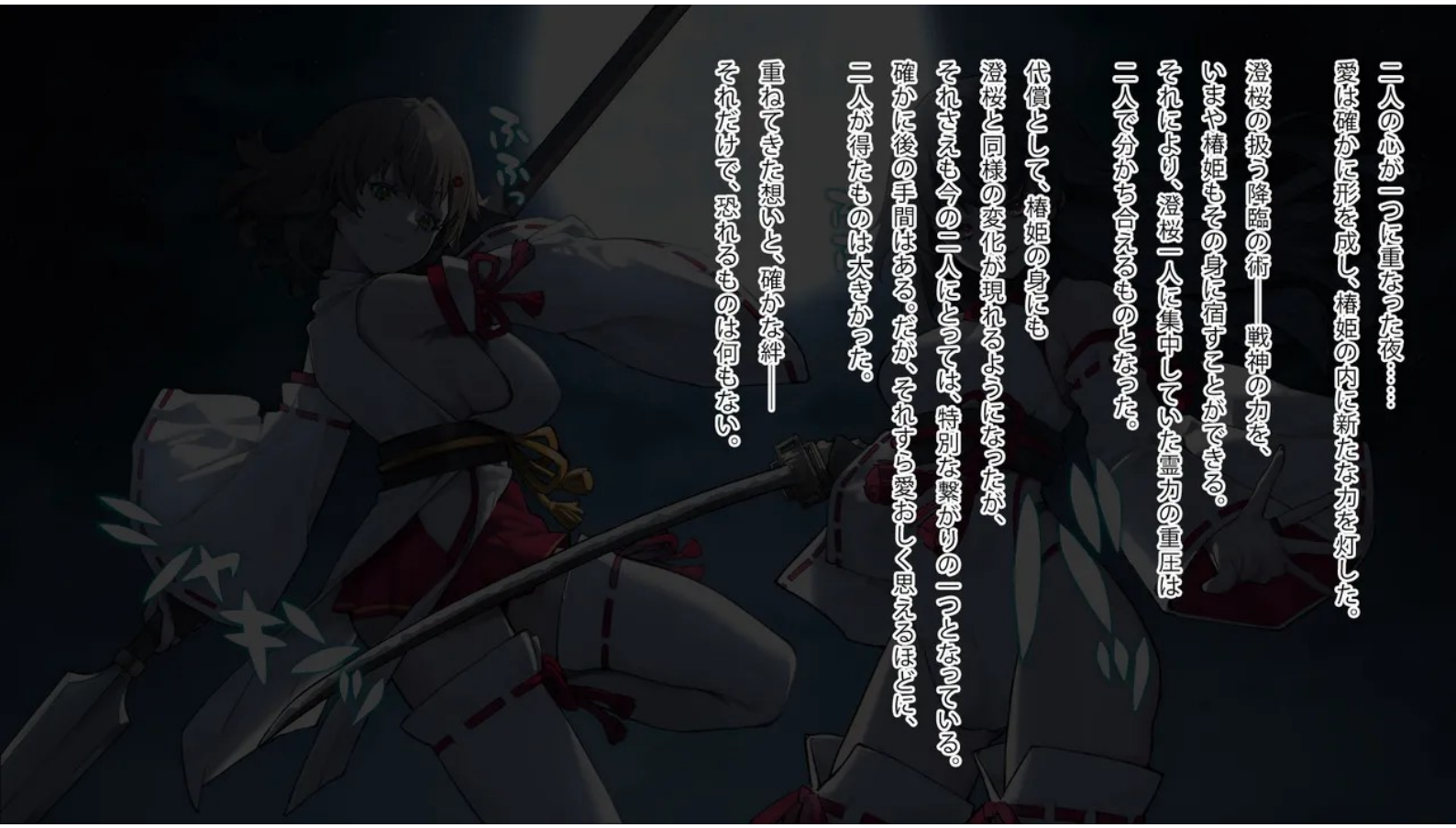

「姉様っ……もう、もうだめっ……でちゃうっ……っ!!」
椿姫の声が高く跳ねた瞬間、澄桜の口内に、熱い奔流が迸った。
「んんっ……あ……っ」
はーっ
はーっ
ああぁっ!
んんっ!
びゅるるっ
どぷっ
どぷっ
びくんっ
澄桜は眉を寄せながらも、その衝動をしっかりと受け止める。
椿姫の全てが自分の中に注がれている――
その実感が、胸を満たしていく。
濃密な重みとともに広がる熱さ。
椿姫が感じていたものを、今、自分も受け止めているという
その事実が胸に沁みた。


少しずつ穏やかになっていく椿姫の呼吸を感じながら、
澄桜は静かに口を離す。
唇に滴った熱を、舌先ですくうようにして喉奥へと送り込んだ。
はーっ
はーっ
んん……っ
どろぉ…
びくびくっ
「……んっ、んん……ん……」
椿姫はその様子を呆然と見つめ、頬を染める。
「姉様が、私のを……の、飲んで……」
「椿姫の……少し苦いけれど、優しい味ね」
淡く微笑む澄桜の言葉に、椿姫の瞳が潤む。
「姉さ――、あっ……！」

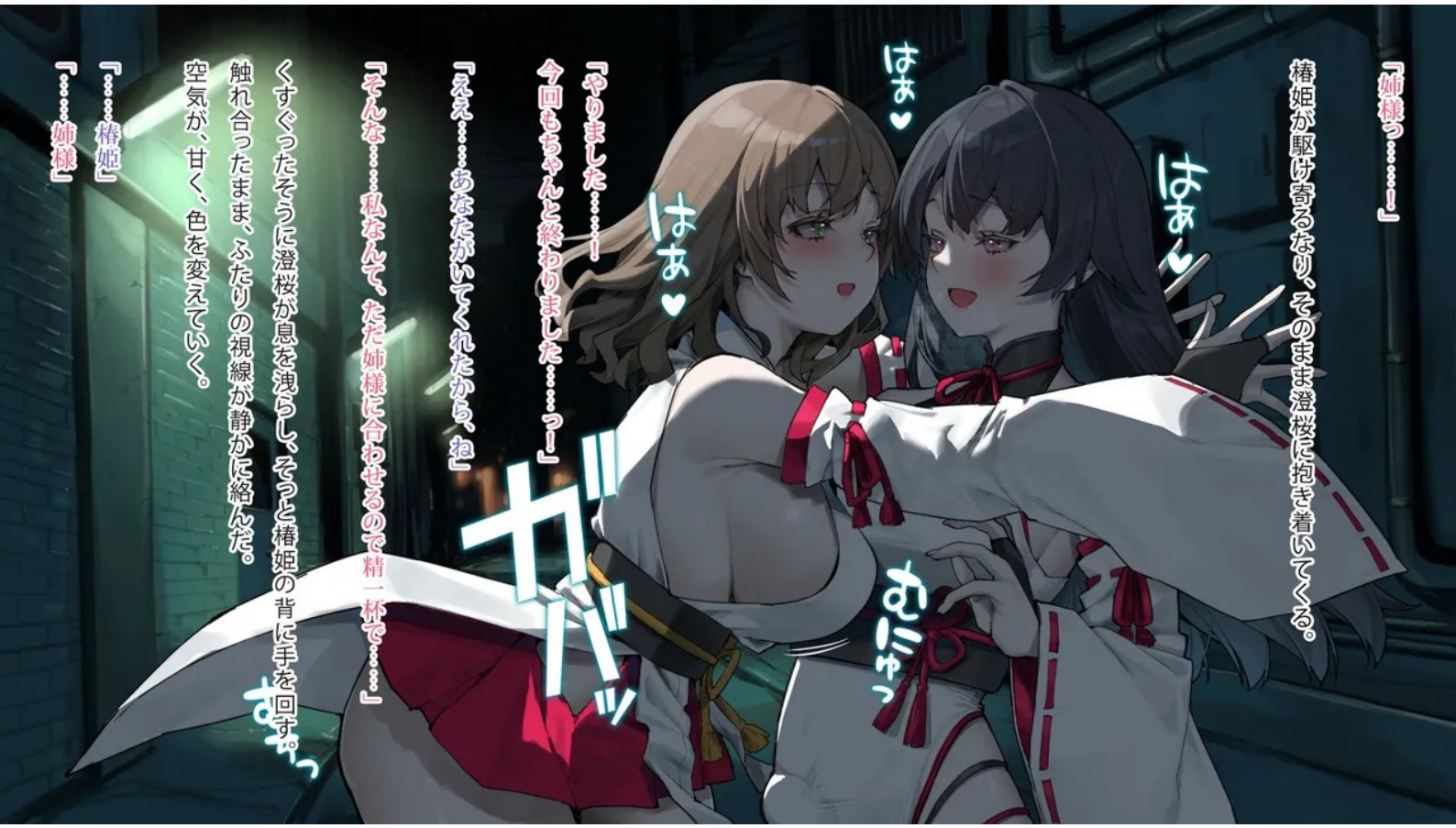

……視線を落としたその瞬間、
椿姫の昂りは煙のように儚く消えていた。
雄の情欲も晴れ、彼女の呼吸も落ち着きを取り戻す。
はぁ
はぁ
はぁ
ふぅっ…
とろぉ…
「……今度は、私が姉様に……
してあげたかった……感じてほしかった、のに……」
小さく、寂しげにそう呟いた椿姫に――
「まったく……椿姫ったら……」
澄桜は、顔を赤らめながらも呆れたように笑う。
「二人一緒なら……いつだって、できるでしょう？」
その言葉に、椿姫は目を潤ませながらも微笑み、そっと頷いた。

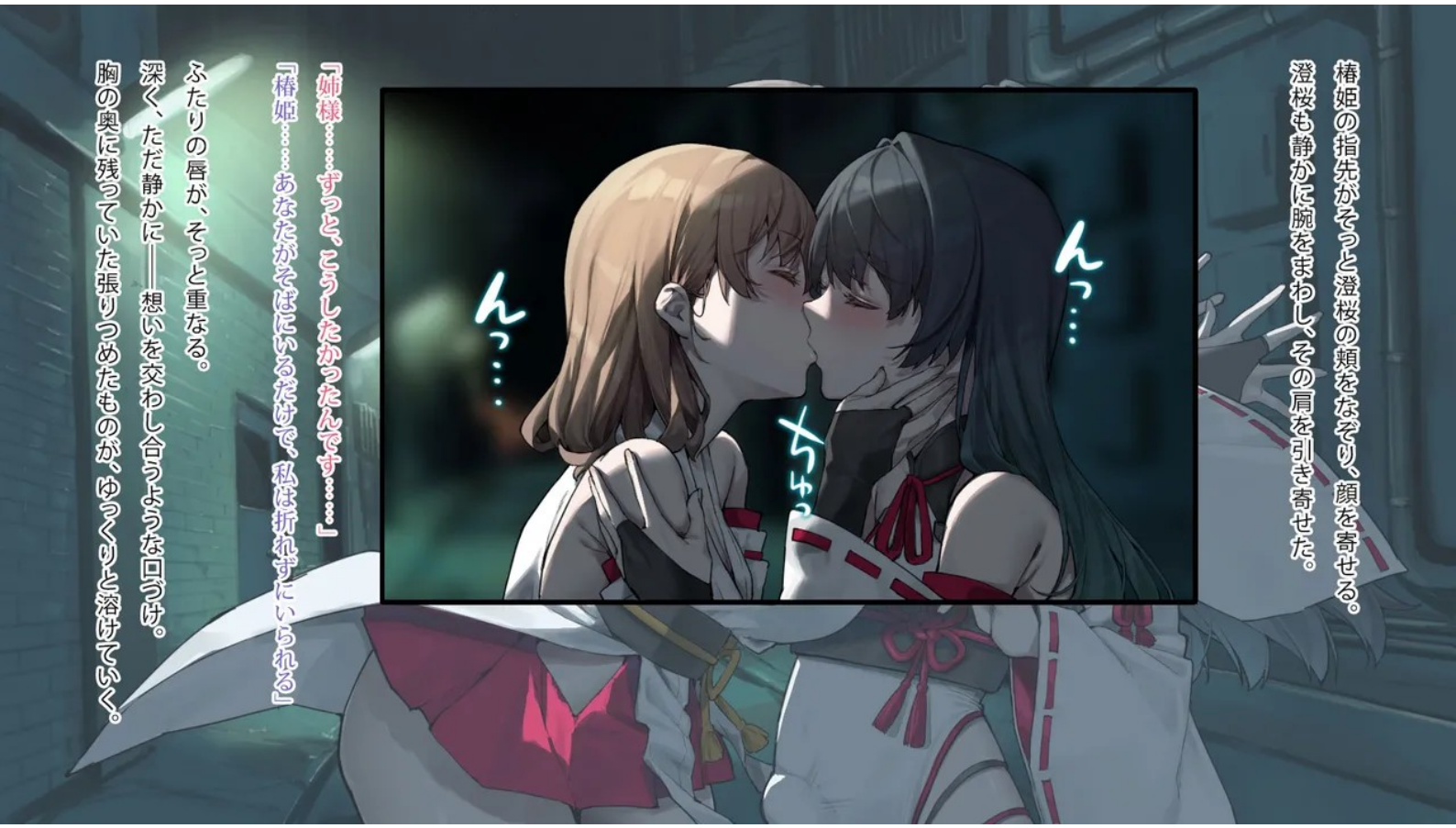



さらに数週間後――。
澄桜と椿姫は、再び妖魔討伐の任にあたっていた。
今回現れたのは、過去に戦った妖魔をはるかに凌ぐ強敵だったが、
二人の表情にはどこか落ち着いた余裕が漂っていた。
「椿姫、今回は――私たち二人で仕留めましょう」
ふふっ
ふふっ
澄桜の声音は静かで揺るぎなく、
鋭い眼差しは敵をまっすぐに捉えている。
「はい、姉様！」
椿姫も迷いなく応じ、澄桜の隣に並び立つ。


二人の心が一つに重なった夜……
愛は確かに形を成し、椿姫の内に新たな力を灯した。
澄桜の扱う降臨の術――戦神の力を、
いまや椿姫もその身に宿すことができる。
それにより、澄桜一人に集中していた霊力の重圧は
二人で分かち合えるものとなった。
代償として、椿姫の身にも
澄桜と同様の変化が現れるようになったが、
それさえも今の二人にとっては、特別な繋がりの一つとなっている。
確かに後の手間はある。だが、それすら愛おしく思えるほどに、
二人が得たものは大きかった。
重ねてきた想いと、確かな絆――
それだけで、恐れるものは何もない。
ふふっ


「我らが血に宿りし戦神よ……再び、我らにその威光を――」
その言葉と共に、二人の身体が眩い神光に包まれた。
顕現した神気は聖域そのものであり、
周囲の空気すら震わせるような圧を帯びてゆく。
霊力が一つに重なった瞬間、凄烈な力が放たれた。
「――神威・退魔滅殺!!」
天地を裂くかのような一閃が妖魔を貫き、
その身は光の奔流に飲まれてゆく。
悲鳴を残して妖魔は霧散し、次の瞬間には塵一つ残さず、
消えていた。

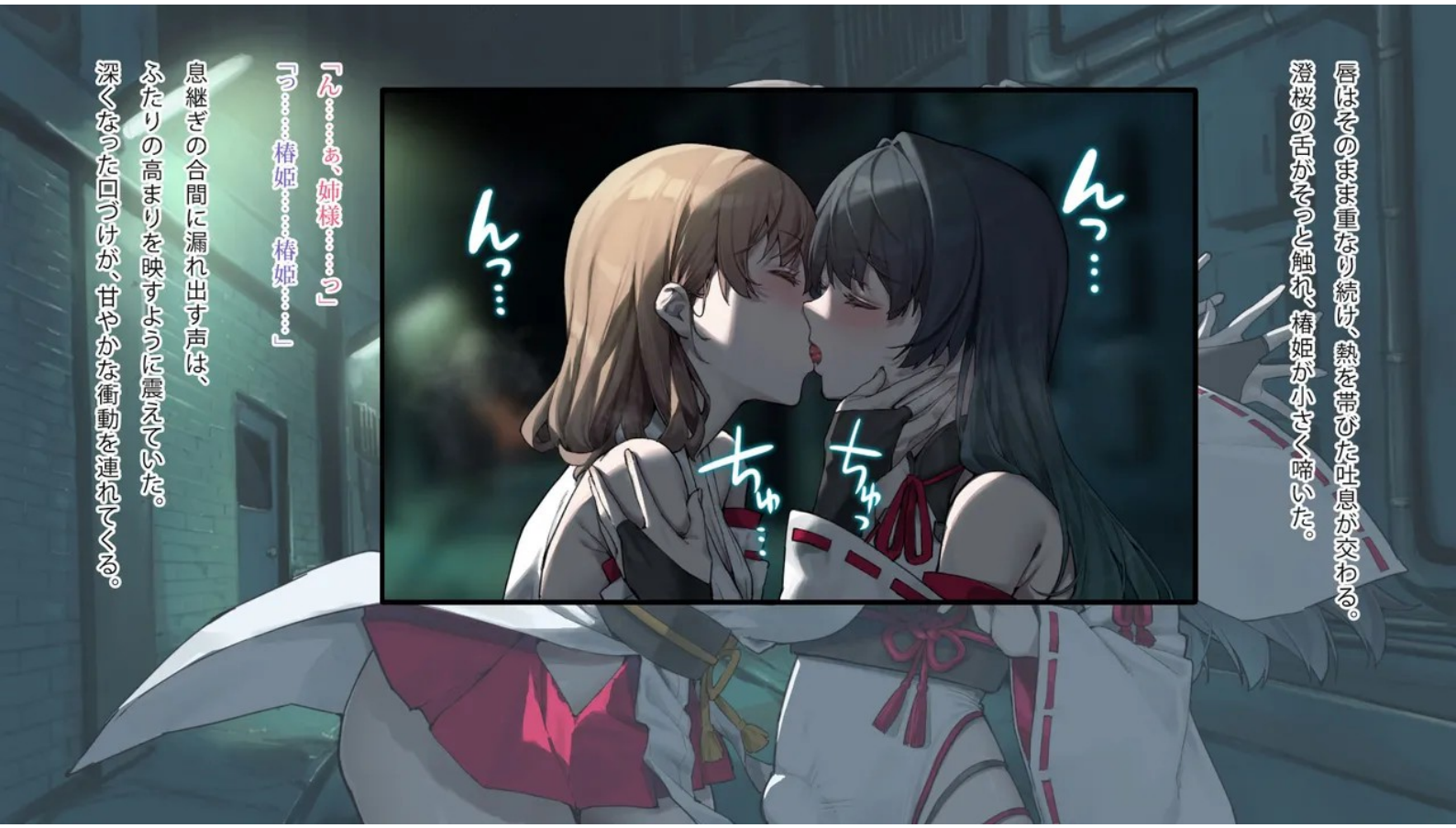

「姉様っ……！」
椿姫が駆け寄るなり、そのまま澄桜に抱き着いてくる。
はぁ♥
はぁ♥
はぁ♥
むにゅっ
ガバッ
「やりました……！
今回もちゃんと終わりました……っ！」
「ええ……あなたがいてくれたから、ね」
「そんな……私なんて、ただ姉様に合わせるので精一杯で……」
すぅっ
くすぐったそうに澄桜が息を洩らし、そっと椿姫の背に手を回す。
触れ合ったまま、ふたりの視線が静かに絡んだ。
空気が、甘く、色を変えていく。
「……椿姫」
「……姉様」



椿姫の指先がそっと澄桜の頬をなぞり、顔を寄せる。
澄桜も静かに腕をまわし、その肩を引き寄せた。

「姉様……ずっと、こうしたかったんです……」
「椿姫……あなたがそばにいるだけで、私は折れずにいられる」

ふたりの唇が、そっと重なる。
深く、ただ静かに――想いを交わし合うような口づけ。
胸の奥に残っていた張りつめたものが、ゆっくりと溶けていく。


唇はそのまま重なり続け、熱を帯びた吐息が交わる。
澄桜の舌がそっと触れ、椿姫が小さく啼いた。
んっ…
んっ…
ちゅっ
ちゅ…
「ん……ぁ、姉様……っ」
「っ……椿姫……椿姫……」
息継ぎの合間に漏れ出す声は、
ふたりの高まりを映すように震えていた。
深くなった口づけが、甘やかな衝動を連れてくる。


長いキスが終わると、椿姫は潤んだ瞳で澄桜を見上げた。
頬は紅く染まり、肩で息をしながら、震える声で言葉を紡ぐ。
ふーっ♥
ふーっ
はーっ♥
はーっ
むにゅっ
むちっ
「ね、姉様……っ。私、もう……我慢、できません……
姉様に……してほしいんです……っ」
澄桜はその訴えに静かに微笑み、彼女の髪をそっと撫でる。
「ええ……椿姫。あなたが望むなら――」



澄桜は椿姫の背後から抱きつくと、
そのまま勢いよく衣をはだけさせた。
露わになった白い肌と、張りつめた昂りが、夜の空気に晒される。



柔らかく揉みしだく指先と同時に、もう片方の手で昂りをゆっくりと擦り始める。

火照った熱が指の間を滑り、椿姫の反応がさらに甘く揺れた。

吐息まじりの声が耳をくすぐる。

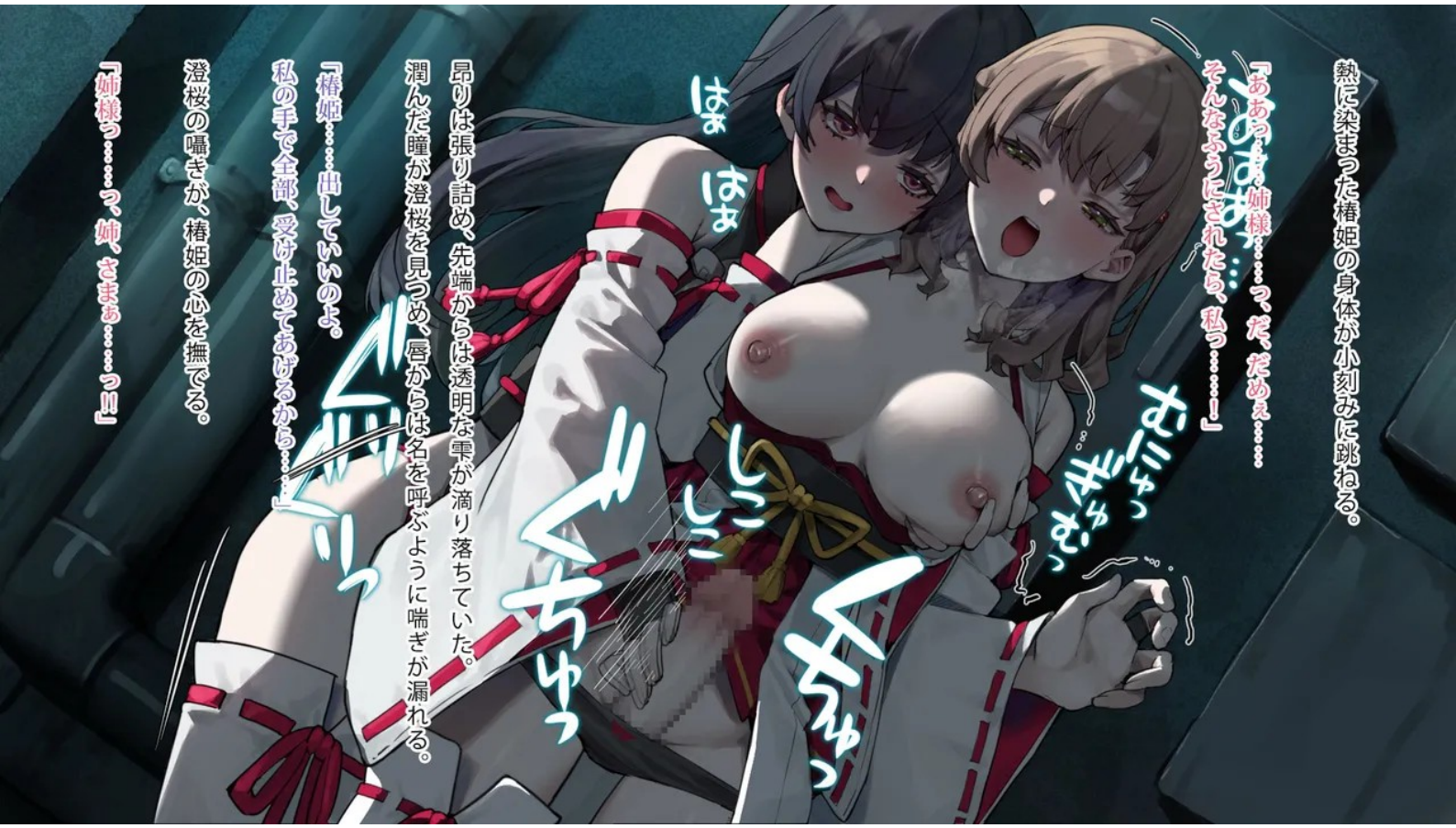
澄桜の手はゆっくりと上下に動き、その感触を丁寧に確かめていく。

同時に、昂ぶりを椿姫の腰へ当てると、やわらかな感触が澄桜の身を震わせた。

互いに火照った身体が触れ合い、擦れるたび、甘い疼きが深まっていく。

「ああっ……姉様……すごい……身体が、溶けちゃいそう……っ」


身体の芯から沸き上がるような感覚に、椿姫は身を揺らす。
その様子に気づいた澄桜が、囁くように声をかけた。
あぁぁっ…
むにゅっ
もみゅっ
はぁ
はぁ
しこ
しこ
くちゅっ
くちゅっ
「椿姫……もう、限界……？」
「……はいっ……姉様に触られるのっ、んっ……
たまらない、からぁっ」
その甘く蕩けた声に応えるように、澄桜は手の動きを速めていく。
根元をしっかりと握り、親指で先端を滑らせながら、
もう片方の手で乳房を揉みしだく。
肌と肌が織りなす快楽の波が、椿姫の全身を呑み込んでいく。


熱に染まった椿姫の身体が小刻みに跳ねる。
「あぁっ、姉様……っ、だ、だめぇ……
そんなふうにされたら、私っ……！」
むにゅっ
むにゅっ
はぁ
はぁ
しこ
しこ
くちゅっ
くちゅっ
昂りは張り詰め、先端からは透明な雫が滴り落ちていた。
潤んだ瞳が澄桜を見つめ、唇からは名を呼ぶように喘ぎが漏れる。
「椿姫……出していいのよ。
私の手で全部、受け止めてあげるから……」
澄桜の囁きが、椿姫の心を撫でる。
「姉様っ……っ、姉、さまぁ……っ!!」


「んっ、あぁあっ……もう……だめぇっ……っ！」
背筋を弓のように反らせ、椿姫は澄桜の手の中で震えた。
「出るっ……出ちゃいます……っ、姉様ぁ……っ!!」
その瞬間、火照った身体から迸るものが、
澄桜の手に溢れるように注がれる。
熱く、脈打ち、押し寄せる奔流。
澄桜は微笑みながら、それをこぼさぬように優しく包み込んだ。



肩を上下させながら、椿姫はとろんとした目で澄桜にもたれかかる。
その顔には、深い満足と余韻が漂っていた。

「椿姫……気持ちよかった……？
あなたが感じてくれて、私も嬉しい……」

澄桜は優しく抱きしめながら、甘く囁いた。



――だが。
椿姫の下腹部では昂りが収まらぬまま、未だ固さを保っている。

「姉様ぁ、まだ足りない、です……
奥で、もっと……姉様を感じたいっ……
このまま終わりたく、ない……っ」

その声に滲む未練と切なさを、そっとふさぐように――
澄桜は椿姫の唇へと、静かに触れる。
触れた唇の温もりが、澄桜の返事そのものだった。



壁際に立たされた椿姫の片足を、澄桜がそっと持ち上げる。
その動きに合わせて、椿姫の身体がわずかに震える。
「姉様ぁ……焦らさないで……っ、早く、お願いします……っ」
澄桜は彼女の願いに応えるように、
ゆっくりと自身を椿姫の入り口にあてがい、腰を沈めていく。
「あぁっ、姉様のが……入ってくるぅ……っ」
「椿姫の中……やわらかくて、吸いついてくるみたい……っ」


熱に駆られるように、澄桜の腰がゆるやかに揺れ始める。
それに応じて、椿姫の昂ぶりもかすかに震え、
じわりと熱を帯びて、次第に張りつめていく。
「あっ……ん、姉様、そんなゆっくりだと……
擦れるたびに、感じちゃいます……っ」
はーっ
はーっ
はーっ
あっ
あっ
「んっ……焦らすみたいに動くと……っ
とろとろになって……奥がぎゅって、咥え込んでくるから……っ
あっ……もっとしたくなっちゃうの……っ」
「んんっ……だって……姉様のが気持ちよすぎるからっ……
勝手に、ぎゅってなっちゃうんです……っ」
パンッ
パンッ
びくびくっ



椿姫の言葉を受けて、澄桜は腰の動きを徐々に激しくしていく。
動きに合わせて、椿姫の身体が小さく震える。

「あっ……あぁっ……姉様、やぁっ、だめぇ……っ
また私……イッちゃ……っ」

「さっきから何度もびくびくさせて……感じてるの、丸わかりよ。
椿姫ったら、本当に素直なんだから……っ」

椿姫の身体が震えるたびに、澄桜の興奮も高まっていく。


「姉様……っ、待って……お願い……」
涙を帯びた瞳で、椿姫が澄桜を見つめる。
はーっ
はーっ
はーっ
あっ
あっ
「私……姉様と一緒に……イきたいんですっ……
姉様の全部を、ちゃんと感じながら……一緒に……っ」
ぐちゅっ
ぬちゅっ
びくびくっ
真っ直ぐに向けられる思いに、
澄桜の胸がきゅうっと締めつけられた。
「椿姫……わかったわ……あなたと一緒に……」


澄桜の腰が打ちつけるように激しく動き、
二人の息が乱れていく。
はぁっ
はぁぁっ
はぁっ
はぁっ
あぁぁっ
パンッ
パンッ
びくっびくっ
「あぁっ……姉様ぁ……っ
わ、私……イきそう、ですっ……も、もう……っ！」
「椿姫っ……私も……っ、もう、限界ぃ……あぁっ……っ！」
燃え上がる欲望に突き動かされ、
ふたりの身体は貪るように重なっていく。


澄桜の昂ぶりが、内側で脈打ち始める。
「はぁっ、椿姫っ……っ、あなたの中で、出したいっ……
お願い、全部、受け止めてぇ……もっ！」
椿姫は息を荒げながら、うなずく。
パンッ
パンッ
はーっ
はぁぁっ
はーっ
はーっ
あぁぁっ
びくっびくっ
「あぁっ……姉様……っ、出して……っ
私の中に、いっぱい……姉様のを感じさせて……っ」
その言葉が火をつけ、澄桜の全身がかっと熱を帯びる。
「椿姫っ……愛してるわっ……!!」
「あぁっ、姉様ぁっ!!」


二人が同時に絶頂に達する。
澄桜は椿姫の中に熱いものを注ぎ込み、
椿姫は体を痙攣させながら声を上げ、自身の熱を解き放つ。
ビクビクッ
びゅるるるっ
びゅーっ
びゅくっ！
はーっ
あああっ
はーっ
はーっ
あああっ
「あぁっ……イくっ、イっちゃうぅぅっ！
姉様……っ！　姉様の熱いのがっ……！」
「椿姫っ……ああぁっ、椿姫い！
止まらないっ、椿姫の中に出すの、気持ちよすぎるぅ……っ！」
二人の声が重なり、熱い息が交錯する。



絶頂が収まり、その余韻に浸る二人。
澄桜はまだ椿姫の中に残したまま、そっと彼女の体を支えていた。
「姉様……お願い……まだ、離れないで……」
椿姫が甘い声で懇願する。
澄桜は彼女の額に触れ、汗ばんだ肌を感じながら優しく微笑む。
「大丈夫よ、椿姫……もう少し、このままでいさせて」
椿姫は壁に手をついたまま、足を震わせながら答える。
「嬉しいです……姉様と、こんなに一つになれて……っ」


ふいに椿姫が囁く。
「姉様……その、私……もっと、欲しいです……。
まだ、全然足りない……」
「ふふ、椿姫はいつからそんな甘えん坊になったのかしら？」
はーっ
はーっ
はーっ
あぁっ…
「だ、だって……私、姉様のこと、もっと……」
どろぉっ…
ビクッ
ビクッ
どろっ…
「だ～め。ここでは、もうおしまい。
続きは帰ってから、二人きりの場所で……ね？」
椿姫は少し不満そうにするも、すぐに甘えた声で返す。
「なら、帰ったら……たっぷり、可愛がってください、ね？」





「……あっ、姉様……
そんなに見られると、恥ずかしいです……」

脱衣所のひんやりとした空気が、
脱いだ肌に触れて火照りを際立たせる。
まだ収まらない熱が、ふたりの身体の奥でじわじわと滲んでいた。

「あら、今さら何を言ってるのかしら。
裸なんて、何度も見せあってきたでしょ？」

「そ、それは……そうですけど……
でも、今は……その……違うんです……」

その熱を宿した瞳を見て、澄桜はほんの少し微笑む。

「椿姫……お願い、見て……私のも、もうこんなに……っ」



澄桜は己の昂ぶりを椿姫の先端にそっと押し当てる。
触れた瞬間、ふたりの呼吸が微かに揺れる。

「……椿姫の……すごく熱い……
触れただけで、びくってして……」

「姉様のも……すごく硬い、です……っ
あんなにいっぱい出したはずなのに……」

濡れた先端が擦れあうたび、
身体の奥からじんわりと熱いものがこみ上げてくる。

「……んっ……はぁ……
椿姫……そんなに擦られたら……っ」

「ん……はぁっ……姉様……
そんな声、出されたら……わたし、また……っ」


互いの吐息が重なり、視線が交差する。
そして、迷うことなく唇が重なる。
「んっ……はぁ……椿姫、好きぃ……
もっと、ちょうだい……んっ、ちゅ……っ」
「ふぁ……姉様ぁ……っ、ん……私も……もっと……
姉様とキス……したい、です……んっ……」
軽く啄むようなキスから、次第に深くなっていく。
唇の柔らかさと吐息が混ざり合い、椿姫の体がわずかに震える。
んっ
ちゅっ
んっ
ちゅっ
びくっ
きゅっ
びくんっ
ぐりぐりっ


澄桜の舌がそっと椿姫の口内に滑り込み、
やさしく誘うように絡め取る。
唾液が混じり、熱を交わすたびにふたりの鼓動が重なっていった。
「椿姫の舌……やわらかくて、絡まるたびに……
んっ、奥が熱くなって……んちゅ、ん……」
「んっ……ちゅ、んん……姉様の舌、触れてると……
とろとろに溶けて混ざっていくみたいで……
気持ちいい、です……っ」
何度も交わす舌の動きが、さらに激しさを増していく。
吐息混じりの甘い音が、二人の間にこぼれた。
「んっ……ちゅ……こうしてると……
本当に、姉様とひとつになったみたい……んちゅ……っ」
ちゅっ
ちゅっ
れろっ
ぬるっ
びくっ
きゅうっ
びくんっ
ぐりぐりっ


やがて唇が離れ、つながった糸がとろりと垂れて途切れる。
ふたりの目が合い、もう言葉を交わすまでもなく通じ合っていた。
「椿姫……そろそろ、はじめましょうか……」
「……はい……っ　姉様のこと、いっぱい……
感じさせてください……」
はぁ
はぁ
はぁ
びくんっ
びくびくっ
澄桜が差し出した手に、椿姫がそっと指を絡める。
乾いた床に、ふたりの足音が静かに重なっていく。


「んっ……椿姫の……大きすぎて……
んん、喉の奥まで、届いちゃいそう……っ」
「んちゅ……ふぁ……姉様の、舐めるたびにびくってして……
んんっ、かわいい、ですっ」
洗い場に仰向けになった澄桜。
その上に跨がった椿姫が、
逆さの体勢で澄桜の口元に自らの昂ぶりを預けていた。
ふたりは互いのものを咥えたまま、
濡れた吐息を交わしながら、舌と唇で丁寧に愛撫を重ねあう。
ふーっ
ふーっ
ちゅぱっ
ちゅっ
ちゅぱっ
ちゅっ
ふーっ
ふーっ


澄桜が首を動かしはじめ、
椿姫のものを深々と咥えこんでいく。
「んっ……あぁ……、姉様っ、そんな奥まで……
んんっ、声、出ちゃうぅ……っ」
「……んちゅ……気持ちよくなって、椿姫……
もっと、声、聞かせて……っ」
「んうっ……ずるいです、姉様ばっかり……っ
次は、わたしの番……！」
ふーっ
んあぁ！
ふーっ
ふーっ


椿姫もまた、澄桜を求めるように動きを早めていく。
喉奥まで咥えこむかのように激しく頭を動かしながら、
先端を舌で舐めしゃぶる。
「……んんっ！　椿姫っ、やぁっ……
そんなに激しくしちゃ……ん、だめ……っ」
「んんっ……ちゅ……姉様にも、
もっと気持ちよくなってほしいの……っ
いっぱい、舐めちゃいますから……んっ、んん……！」
ふーっ
ふーっ
ふーっ
ふーっ



二人の頭が上下し、重なる音がいやらしく響きわたる。

「んっ……んんっ、椿姫……
そんなに激しく吸ったら……っ、私、もう……っ」

「ちゅっ、んんっ……姉様の、またびくって……っ
私も、もう我慢できなっ、ああっ、出ちゃ……っ」

押し寄せる波が、全身を突き上げていき――


「椿姫……っ、だめ……もう、出るっ……
出ちゃうぅ……っ、んんっ……!!」
「んうっ……私も……っ、限界っ……
姉様の口の中で……全部っ……イっちゃいます……っ！」
快感に震えた瞬間、堰を切ったように熱が迸り、
互いの口内を激しく満たしていく。
喉の奥を押し広げるように、濃く重たい精が
とめどなく注ぎこまれていく。
んん～～っ
びゅるるるっ
びくびくっ
びゅるるっ
びくびくっ
んん……っ



やがて熱が収まり、二人の喉奥に最後の余韻だけが残った。

「んっ……熱っ……椿姫のが、いっぱい……んんっ……」

「んんっ……ふぁ……、姉様の……喉に絡みついて……ん……、んっ……」

舌の上でどろりと広がる味を、二人とも吐き出すことなく、懸命に飲み込んでいく。



椿姫は熱を帯びた呼吸を静かに整える。
体勢は崩さずとも、胸の奥から溢れる思いが、
抑えきれず言葉になっていった。
「姉様……っ、あの……」
言葉に詰まりながらも、絞り出すように続ける椿姫。


「私……姉様の全部を感じたい……。
私のを、姉様の中に入れさせてほしいです……っ」
澄桜は少し驚いた素振りを見せたが、すぐに微笑み返す。
「欲しいの……私も椿姫と、もっと深く繋がりたい……
来て、私の中に……っ」
ふーっ
どろぉ…
ふーっ
どろぉ…
ふーっ


澄桜は騎乗位の体勢で、
椿姫の昂りをゆっくりと飲み込んでいく。
「んっ……椿姫の、硬くて……熱いのが……っ、
深いところまで、来てるぅ……っ」
柔肉が絡みつくたび、
椿姫の吐息がかすかに上ずる。
「あっ、姉様に……私の、全部っ……呑み込まれて……っ
んんっ、奥まで吸いつかれてるみたいで……
とろけちゃいそう、です……っ」
んんっ
びくんっ
ずぷぷっ
にちゃっ
あぁあっ


「椿姫の……全部、私の中に入っちゃった。
私の奥……椿姫の熱さで満たされて……私、今、幸せよ」
はーっ
はーっ
びくんっ
きゅうっ
きゅっ
澄桜は小さく息を呑み、愛おしさを伝えるかのように、
椿姫の昂ぶりをやさしく包みこむ。
「そ、そんなふうに言われたら……っ　止まれなくなっちゃう……！
姉様の中、熱くて……気持ちよすぎるからっ……!!」
はーっ
吐息まじりの声が震えた瞬間、椿姫の身体が微かに跳ね、
溜めていた衝動がそのまま動きへと変わっていく。


「姉様……っ、身体が勝手に……もう、腰が動いちゃう……！」
あっ
はーっ
あんっ
はーっ
パンッ
ビクビクッ
ぎちゅんっ
ぱちゅんっ
パンッ
抑えきれない衝動が椿姫の下半身を突き動かし、
熱を持った昂りが澄桜の内奥を抉る。
「あっ……んんっ、椿姫っ……激しっ
奥、ずんって響いて……ぁあっ……！」
はーっ
はーっ
はあぁっ
甘く痺れる感触が腹の奥から拡がって、
澄桜の身体がかすかに跳ねる。


「ふぁ……っ、んんっ……椿姫、だめ……っ
そこ、何度も擦られ、たらぁ……っ」
んんっ
はーっ
んっ……
パンッ
ビクビクッ
はーっ
ぬちゅんっ
ぬちゅんっ
パンッ
欲に導かれるように、
澄桜の腰が小さく打ちつけるように動き出す。
「あっ……あっ、姉様っ、だめ……勝手に動いたら……
私っ、持たなくなっちゃいます、からぁ……っ！」
はーっ
あんっ
あっ
椿姫の声がかすれ、潤んだ瞳が澄桜を見つめ返す。



椿姫はむくれた声を漏らしながら澄桜の下腹部へと手を伸ばし、熱を帯びた茎を、掌で包み込むように握り締めた。

澄桜の声が跳ね、太腿がびくんと震える。


「だ、だめ……そんなふうに、同時にされたら……っ
私……声、我慢できなく、なっ……んっ……あっ、奥う……っ！」
澄桜が快感に膝を震わせ、ひときわ高く喘ぐ。
「あっ……姉様の中っ、きゅって……絡みついて、くる……っ
んっ……こんなに締めつけて……もっと欲しいんですね、ねっ!!」
椿姫の腰が跳ねるたび、水音とともに、
ふたりの熱が激しく混ざり合っていく。


「椿姫っ……もう、もう我慢できないっ……！
お願いっ、一緒にイって！　あなたのを奥に、いっぱい出してぇ……っ！」
あんっ
はーっ
あっ
パンッ
パンッ
しこしこ
ぬちゅっ
ぬちゅんっ
澄桜の瞳が潤み、椿姫の昂りをきつく締めあげる。
「っ、姉様……っ　私もっ、もうすぐイキそう、だから……っ
全部、姉様に……姉様の中にっ、出しますっ……！」
はーっ
はーっ
あんっ
あっ
椿姫の腰が最後のひと突きを刻むように激しく沈み込む。
熱が爆ぜる寸前、ふたりの身体が震える。


「あっ、ああっ……椿姫っ……っ
熱いの、奥に……どくどくって、いっぱい来て……っ！
んぁっ、あっ、私も……出る、出ちゃう……っ!!」
ああっ！
びゅるるるっ
びゅくんっ
どくどくっ
澄桜の喉が甘く震え、腰を跳ねさせながら
快感に突き上げられるように震える。
「姉様ぁ……っ、んんっ、イってる……っ
私の……っ、全部、出てるの……受け取めて……っ、あっ、ああっ!!」
はーっ
はーっ
ああっ！
椿姫の叫ぶような声とともに、
白濁した熱が澄桜の奥深くまで注ぎ込まれていく。


びゅるるっ
はーっ
ああっ！
びゅ～～っ！
びゅるるるっ
どくどくっ
びゅくんっ
「っ……椿姫……っ、まだ、止まらないの……！
奥に……んぁっ、熱いの、当たって……っ　ああっ……っ！」
澄桜の腰が痙攣し、とろけるような快感の中で、
椿姫の熱を震えながら受け止め続ける。
「姉様のも……っ、んんっ……手の中で……熱く、脈打ってて……っ
こんなに……溢れて……んんっ……」
ああっ！
はーっ
はーっ
椿姫の指の隙間から溢れた白濁が、澄桜の下腹をぬるりと伝い、
ふたりの熱を結び直すようにとろりと肌を滑っていく。


「はぁっ……ん、椿姫……っ
あなたのが、奥で……まだ熱くて……っ、私……」
荒い息を少しずつ整えながら、
澄桜は甘く吐息を漏らし、蕩けるように腰を沈めた。
「んん……っ、ん……姉様のも……
まだ……こんなに、元気です……っ」
熱に濡れた椿姫の声が、余韻の中で震える。
互いの肌を濡らす白濁の温もりを感じながら、澄桜はふと、
自身の昂ぶりに視線を落とす。



白濁に濡れながらもなお硬さを保つ自身を一瞥すると、
澄桜は口角をわずかに上げ、含み笑いをこぼした。

「さて……今度は私の番ね、椿姫……たっぷり可愛がってあげる」

澄桜の昂りが、熱を残したまま、ぴくりと反応する。

「え、ええと……姉様も、気持ちよかったんだし……
それでおあいこ、なんて……あ、はは……」

目を泳がせながら、ばつが悪そうに肩をすくめて顔を逸らす椿姫。
澄桜はそんな椿姫に手を伸ばすと、
頬にそっと触れて、指先でやさしく撫でた。



澄桜は椿姫の腰をそっと抱き寄せると、
自らの上に乗せるようにしてゆっくりと繋がっていく。

「……椿姫、真っ赤になっちゃって可愛いわね。
さっきまで、あんなに積極的だったのに」

澄桜がからかうように囁きながら、
そっと椿姫の腰に手を添える。

「だ、だって……っ、こんな体勢で……
姉様の熱とか、鼓動とか……全部、感じたら、私……っ」

「いつもこれくらい素直なら、もっと可愛げあるのにね、ふふ」

「ね、姉様ったら、もう……っ」


「椿姫……キス、して」
澄桜の囁きに、椿姫は瞳を潤ませながら静かに顔を近づけた。
「んっ……ちゅ……んぅ……っ」
そっと重ねられた唇が二人の熱をやさしく溶かし、
澄桜の腰が静かに動き出す。
「……あなたの中……温かくて、とろけちゃい、そう……
全身が包まれてるみたいで……ん……っ」
「んっ……んんっ、姉様……っ、そんな……
動かれたら……んぁっ……っ」
ちゅっ
むにゅんっ
ぎゅっ
ぬちゅっ
ぐちゅっ
パンパンッ


「んぁ……っ、ん……姉様の、舌……ふぁ……っ」
舌先を絡め合いながら、椿姫の身体が震える。
「あむ……んっ……椿姫……もっと感じさせて」
ちゅっ
れろっ
むにゅんっ
ぎゅっ
ぱんぱんっ
くちゅっ
澄桜の腰が、椿姫の奥を確かめるように突き上げる。
そのたびに熱を帯びていく動きが、
次第に強く、深く——激しさを増していく。
「んっ……んんっ、そこ……っ
とろけちゃいそう……っ　姉様……離れたくない……っ」


キスを解き、澄桜がやさしく囁く。
「椿姫……好きよ。誰よりも、ずっと……あなたのことが」
「わたしも……姉様が大好き……愛して、ますっ……」
はーっ
あんっ
むにゅんっ
はーっ
あぁっ
ぎゅうっ
ぬちゅんっ
甘く蕩けた瞳が交差し、
椿姫の膣がきゅっと澄桜を締めつける。
「……っ、そんなふうにされたら……
気持ちよすぎて……もう、我慢できない……っ」


「姉様……っ、お願い……中にいっぱい、出して……っ
姉様の、奥にちょうだいっ……！」
「椿姫……そんなの、言われたらっ……んっ、もう、止まらない……っ！」
はーっ
あんっ
むにゅんっ
はーっ
あぁっ
びくびくっ
ぐちゅんっ
ぐちゅんっ
「んぁっ……私っ……姉様の赤ちゃん、欲しいの……
だから……お願い、中に……っ！」
びくびくっ
「……っ、椿姫っ……愛してる。
私の子を孕んで……、ずっと一緒にいて……っ」
腰を深く打ちつけた瞬間、快感が重なり合って弾け、
限界の波が一気に押し寄せてくる。
「椿姫……もう……っ、だめ、出るっ……!!」
澄桜の声が震え、全身に緊張が走る。

次の瞬間、澄桜の昂ぶりが椿姫の奥深くへと、
熱を放つように弾けた。
白濁が膣内へと注がれ、その温もりに応えるように、
椿姫の身体も大きく震える。
椿姫の昂りも震え、そこから溢れた精が澄桜のお腹を濡らしていく。



「あっ……んんっ……っ、姉様ぁ……っ」
「椿姫……キス、して……っ」
一緒に……っ」
求め合うように唇が重なり、震える吐息と声が交じり合う。
「んっ……ちゅっ、ふぁ……っ　んんっ……んく……っ！」


「んん……っ　椿姫の中っ……ぎゅっと締めつけてきて……っ
出すの、止まらない……っ」
「姉様のが……どくどくって……出てるの、感じます……っ
子宮に、熱いのがいっぱい……っ」
んんっ
ちゅっ
びくっ
どぴゅるるっ
びゅうっ
びゅくっ
びゅくっ
どぷっ
びゅるるっ
唇を重ねたまま、ふたりはゆるやかな余韻にとろけていく。
注ぎ込まれた熱が椿姫の奥で微かに脈打ち、
深く、静かに二人を繋いでいく。


「あっ――――」
唇を離した椿姫が、その身体を小さく震わせる。
ふーっ
ふーっ
…ぁっ
ぴくぴく…
「椿姫……？」
「……姉様のいちゃんと届いて……そっか……」
ぴゅっ…
とろぉ…
頬を赤らめながら、そっと澄桜を見つめる椿姫の表情には、
確かな喜びが滲む。
ぷにちゅんっ…


「……っ、消えていく……」
澄桜が自らの下腹に目をやると、
昂りの輪郭が淡く光りながら、霧のように解けていった。
ふーっ
ふーっ
「姉様……っ、私のも……」
椿姫も視線を落とし、同じように自分の身体の変化を見つめる。
静かに息を呑み、そっとお腹の奥に意識を向けると――
微かな感覚が、確かにそこにある。
あたたかくて、やわらかくて、なにかが芽生えたような……。
その確信に、椿姫はふっと微笑む。
「……たぶん……さっきので……
姉様との赤ちゃん、できちゃいました……っ」


「……本当、に……？　椿姫と、私の……」
澄桜の声がかすれ、自然とその瞳に光が滲む。
「はい……あの時、奥で……感じたんです。
私、姉様の子を授かったんだ……って」
「――――っ、椿姫……っ、ありがとう……
私の想い、ちゃんと届いてたのね……よかった……」
その言葉に椿姫は小さくうなずき、
頬を染めながら微笑んだ。


「椿姫……」
「姉様……」
ふたりの唇が、静かに、深く、重なり合う。
んっ…
ちゅっ…
ちゅっ…
とろぉ…
長く甘いキスを交わしながら、二人は確かに感じていた。
椿姫の中に芽吹いた命と――
二人の絆を結び直した、永遠の愛を。





午後の光が縁側に差し込み、あたたかな春の風が障子を揺らす。
澄桜と椿姫は並んで座り、
静かに季節の匂いを胸いっぱいに吸い込んでいた。

「姉様、もうすぐ……私たちの赤ちゃんに会えるんですね……」

椿姫は膨らんだお腹を優しく撫でながら、
嬉しそうに笑みをこぼす。

「ええ……ふたりで授かった命……。
早く会いたいわ、この腕で大切に抱いてあげたい」


澄桜の指がそっと椿姫の腹に添えられる。
柔らかな感触に、微笑みが滲む。
「姉様と一緒にいられるだけで、十分幸せだったのに……
こんな奇跡までいただけるなんて……」
「この子と出会えるのも、あなたが隣にいてくれたから……
ありがとう、椿姫……」
淡い風が、桜の香を運ぶ。
二人の間の時間が、やわらかく満ちていく。
「ねぇ、姉様……
この子は、いったいどんな子になるんでしょうね……？」


「きっと、あなたみたいに素直で、明るくて……可愛らしい子よ」
「それなら、姉様みたいな子でも素敵だと思います。優しくて、ちょっと照れ屋さんで……」
「……椿姫ったら、もう……」
言いかけて、澄桜はふと視線を落とした。
頬がほんのりと染まる。
「椿姫……次は……私が、あなたの子を……孕みたいなって、そう思ってるの」
その言葉に、椿姫の目が一瞬だけ驚きに揺れ、すぐにやわらかな笑みに変わった。


「……姉様……それも、いいですね。
次は私が、姉様を守る番ですから……」
目が合う。
どちらからともなく、唇が近づいて――そっと、重なる。
静かに、深く。
春風の中、桜の花びらがひらひらと舞い降りていた。


Fin


ミヤキン


キィンッ


ガバッ
びくっ
むにゅっ
むちっ


も、もう…
んん～♥
むにゅっ
むちっ


むぅ～～っ
むにゅっ
むちっ


えっ!?
ビクンッ
ビクッ


かぁっ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ぴくっ


んんっ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
しこしこしゅっしゅっ
ビクンッ


あぁっ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ビクビクッ
しこしこしゅっしゅっ


あっあっ
はっ
はーっ
はーっ
ビクビクッ
しこしこ
ちゅっちゅっ


はーっ
はーっ
あああっ…！
ビクンッ
びゅるるるるっ
びゅーっ


はぁ
はぁ
はぁ
ああ…
はぁ
どろぉ…
ビクンッ

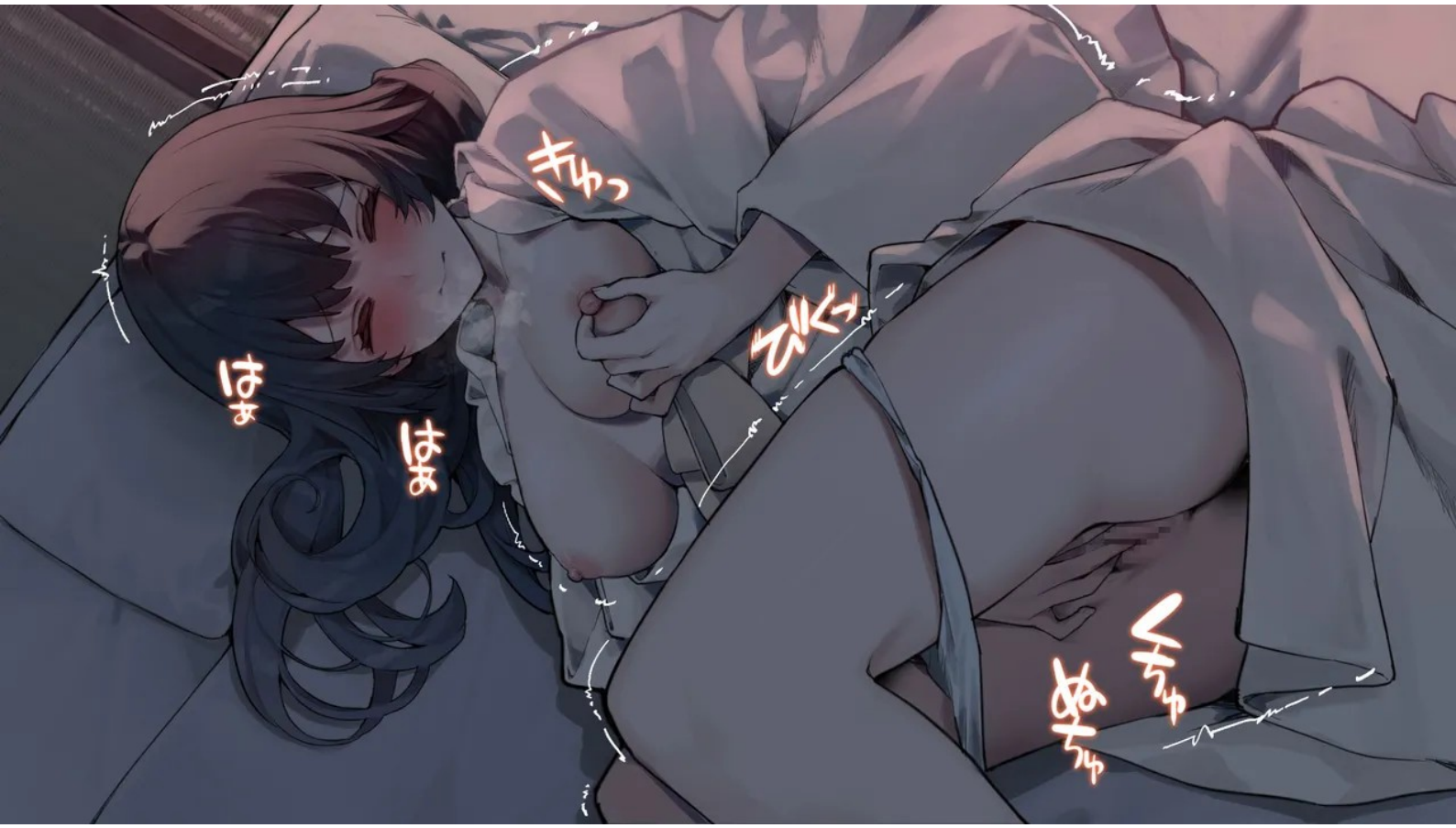

あ…
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
どうぞ…
ふっ…


ん…


もう…
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
どろっ…
どろっお…


もう…
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
どろっ…
どろっお…


きゅっ
はぁ
はぁ
スッ…


きゅっ
びくっ
はぁ
はぁ
くちゅ
ぬちゅ


くりっ
びくっ
はぁ
はぁ
くちゅ
ぬちゅ
ぐちゅ

くりっ
はぁ
はぁ
ビクビク
くちゅ
ぬちゅ
ぐちゅ

きゅうっ
あああっ
ビクビクッ
プシャアアッ


はぁ
はぁ
ぐちゅ
ぬちゅ
ぐちゅ


んっ…
くちゅっ
ぐちゅ


んんっ
くちゅ
ぐちゅ


ミヤキン


ガッ



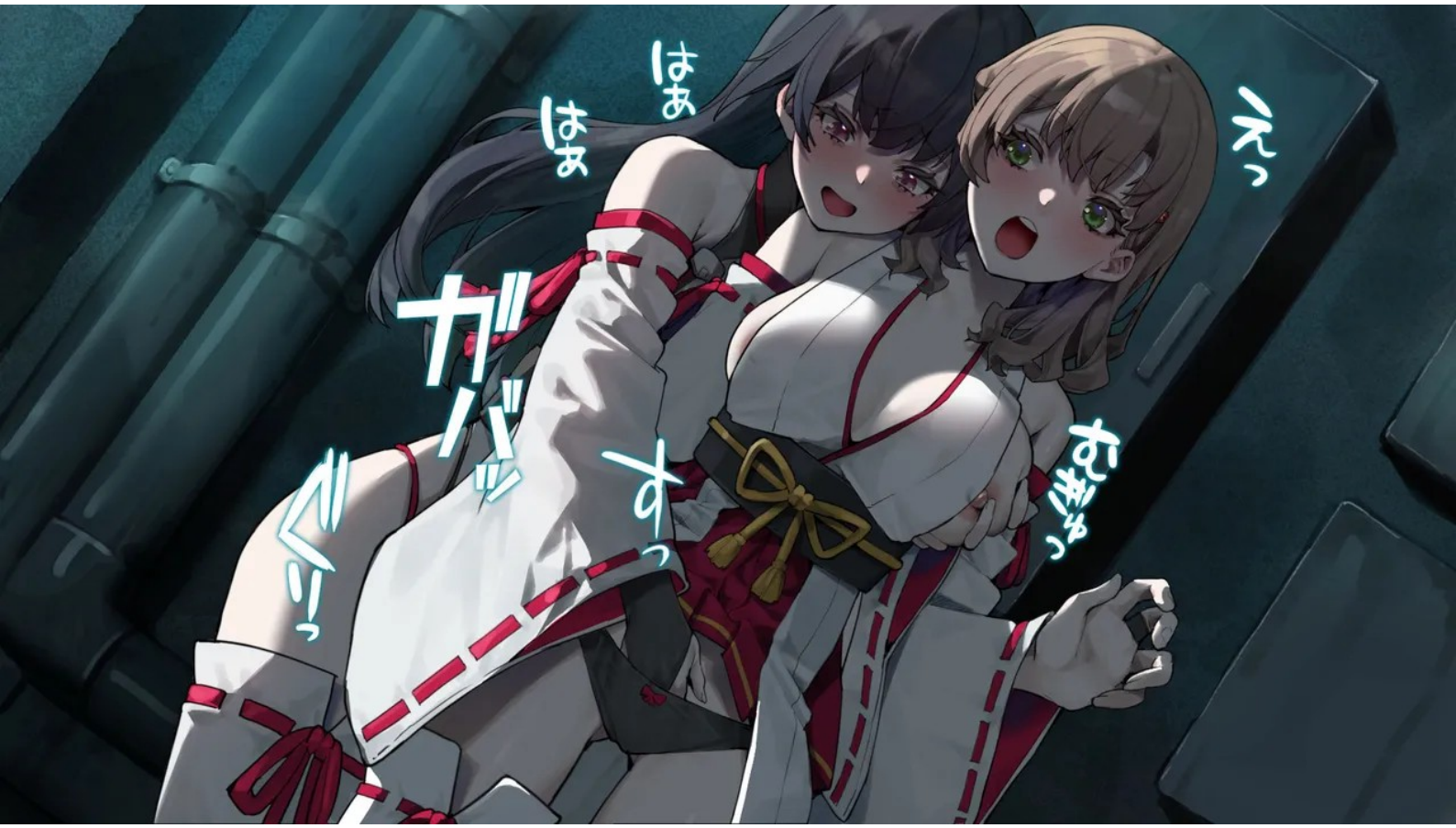

ゴォッ
キィンッ

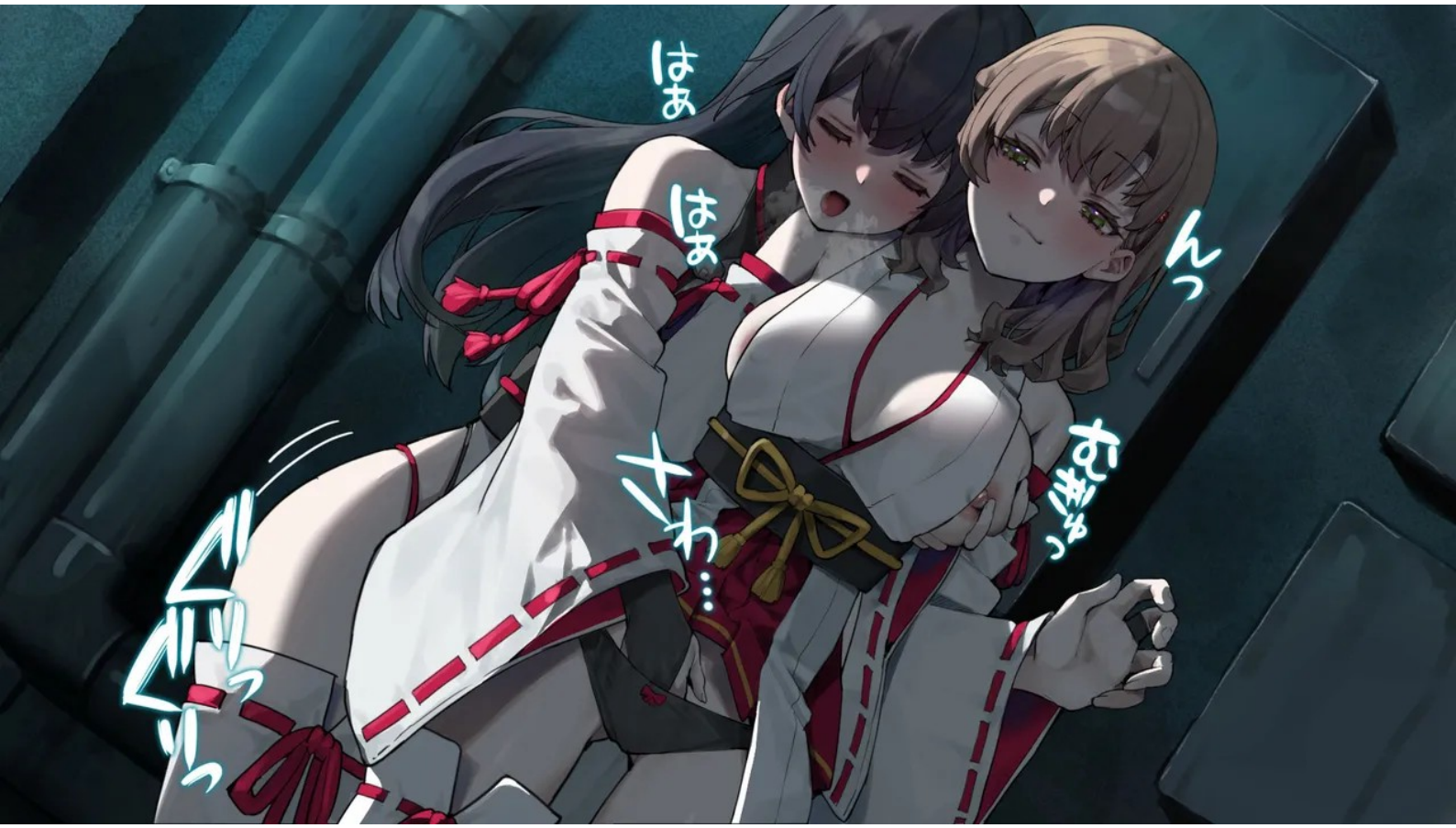

ガバッ
むにゅっ
むちっ


んんっ…
むにゅっ
ビクッ
ビクッ
むちっ


んんっ…
むにゅっ
ビクッ
ビクッ
むちっ


えっ!?
あぁぁっ
バッ
ビクッ
ビクッ


えっ
はぁ
はぁ
ガバッ
むぎゅっ
すっ
ぐいっ


はぁ
はぁ
んっ
むぎゅっ
ナニわ…
くりっ
くりっ


はーっ
はーっ
あっ
ぐりんっ
くちゅ…
くいっ
くいっ


あんっ あっ
はーっ
はーっ
おにぃちゃ…
くちゅ…
くりっ
くりっ


はーっ
はーっ
くちゅ…


はぁ
はぁ
ぎゅむっ
ビクッ
ぎゅむっ


はぁ
はぁ
むにゅっ
ビクッ
むにゅっ
はぁ
はぁ

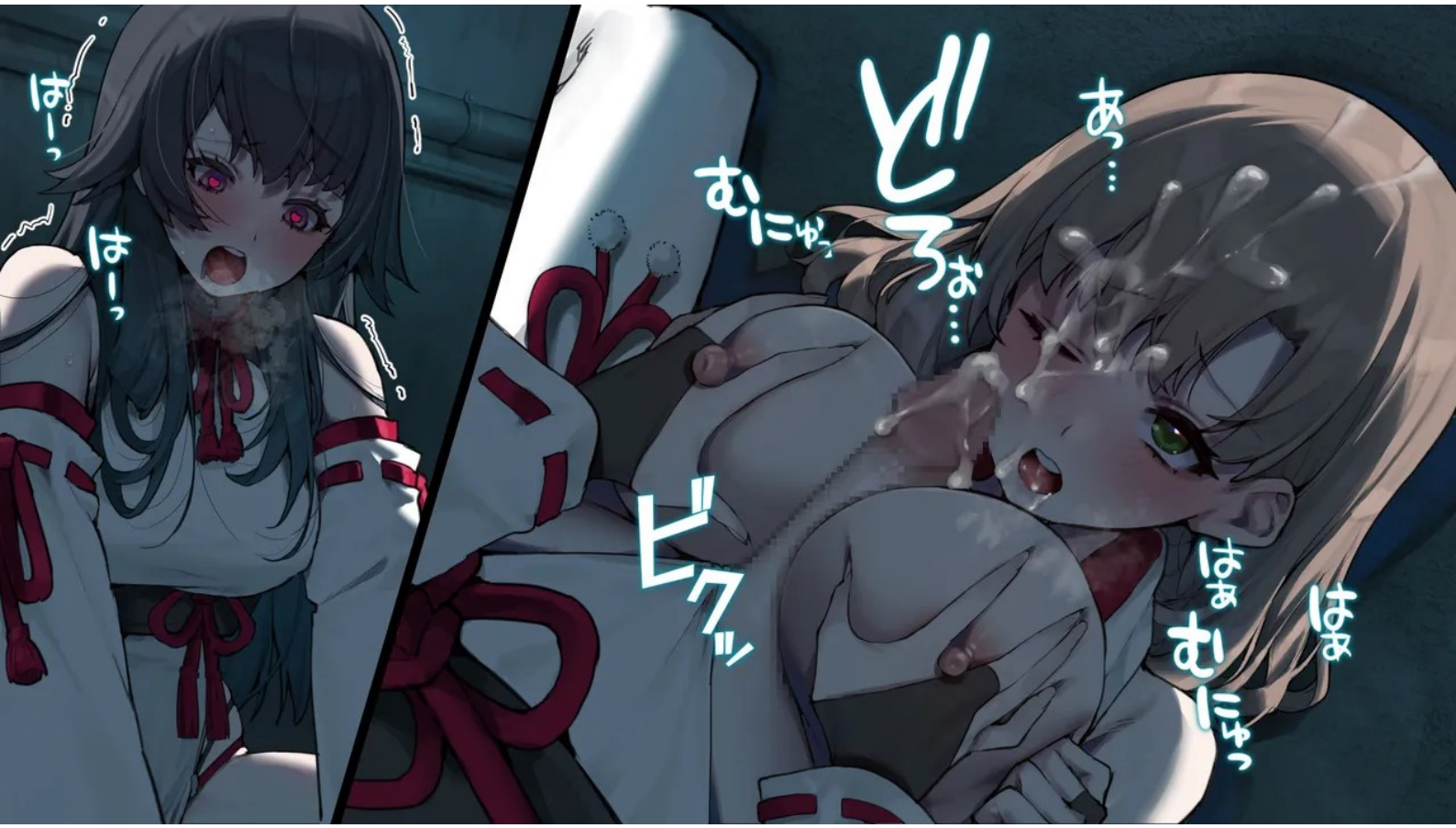

はぁ
はぁ
むにゅっ
ビクビクッ!!
むにゅっ
はーっ
はーっ


はーっ
はーっ
はぁ
はぁ
むにゅっ
ぺろっ
ビクビクッ
むにゅっ


はーっ
はーっ
はぁ
ちゅぱっ
ちゅうっ
ぢゅむっ
はぁ
ぢゅむっ
ぬりゅっ
ぬりゅっ


はーっ
はーっ
んっ
ちゅぱっ
ちゅうっ
ぢゅむっ
はぁ
はぁ
ぢゅむっ
ぬりゅっ
ぬりゅっ


あっ
びゅくっ
びゅるるっ
ビクンッ!
はあああっ…!


はーっ
はーっ
あっ…
どろぉ…
むにゅっ
ビクッ
はぁ
はぁ
むにゅっ

ズバッ
ずぷぷっ
ずぷぷっ
なぁぁ…
ビクンッ
あぁぁっ

ビクビクッ
ぎちっ
ぎちっ
なぁ
なぁ
なぁ
なぁ

パンッ
パンッ
ぬちゃっ
ぬちゃっ
はーっ
はーっ
ビクンッ
あぁあっ


パンパン
ずちゅっ
ずちゅっ
はーっ
はーっ
ビクンビクン
あんっ
あんっ


ビクンッ
ぴゅ～～っ
ぴゅるるっ
どくっどくっ
あぁあっ…！
ビクビクッ
ふぁあっ…！

あぁ…
ビクビクッ
どろぉ…
ビクビクッ
はぁ
はぁ…

はーっ
はーっ
ビクビクッ
どろぉ…
ビクビクッ
はぁ
なぁ

はーっ
はーっ
ずちゅっ
ずちゅっ
ビクンビクン
あぁっ…

はーっ
はーっ
ずちゅっ
ずちゅっ
ビクンビクン
あぁっ…


あぁぁっ
ビクンッ
びゅるるるっ
びゅく
びゅくっ
ビクビクッ
ひぁっ…！


あぁぁっ
びゅくっびゅくっびゅ～～～っ
ビクンッ
びゅるるるっ
びゅく
びゅくっ
ひぁっ..!

はぁ
はぁ
ビクビクッ
どろぉ…
ビクビクッ
はぁ
はぁ

はぁ
はぁ
ビクビクッ
どろぉ…
ビクビクッ
はぁ
はぁ


ズッ…
ぬちゅっ…
きゅっ

ビクッ
はぁ
はぁ
きゅっ
ぬちゅっ
ぬちゅっ

ビクビクッ
はぁ
はぁ
パンパンッ
きゅっ


ビクッ
んっ…
ちゅっ…
きゅっ
パンッ


ビクビクッ
ちゅっ…
れろっ…
ぎゅうっ
パンパン


ビクンッ…
ちゅっ…
れろっ…
ぎゅうっ
ハァハァ

ビクビクッ
ちゅっ…
れろっ…
ぎゅっ
ぎゅっ
ハァハァ


ビクンッ
あぁぁっ！
はぁぁっ！
ぎゅうっ
びゅうっ
びゅるるっ
びゅくっ


ビクンッ
んんっ…
ちゅうっ…
ぎゅうっ
びゅうぅぅっ
びゅるるっ
びゅくっ


びくっ
んんっ…
ぎゅっ
ぎゅうっ
ちゅうっ…
どろぉ…

…？
きゅっ
きゅっ
どろぉ…


えっえっ!?
えっ
びくんっ


はぁ
はぁ
ふぅ…
びくんっ


はぁ
あぁぁっ！
んちゅっ
はぁ
ビクビクッ
びくんっ


はぁ
あぁぁっ！
ちゅぱっ
れろっ
はぁ
ビクビクッ
びくんっ


はーっ
んあぁっ！
じゅぽっ
じゅるるっ
はーっ
ビクンッ
ビクンッ
びくびくっ


はーっ
ああぁっ！
はっ
んんっ！
びゅるるっ
どぷっ
どぷっ
びくんっ

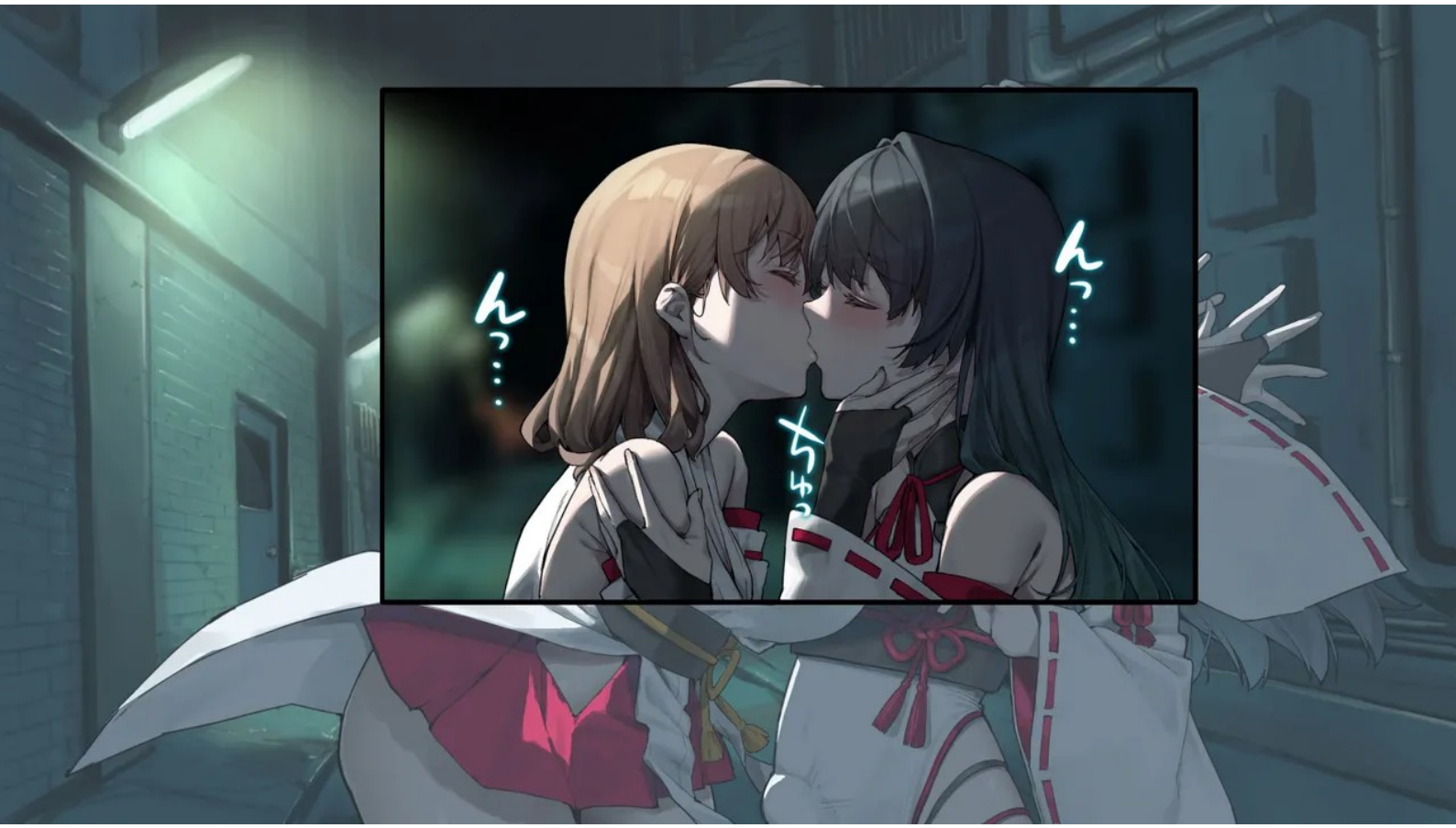

はーっ
はーっ
んん……っ
どろっお…
びくびくっ

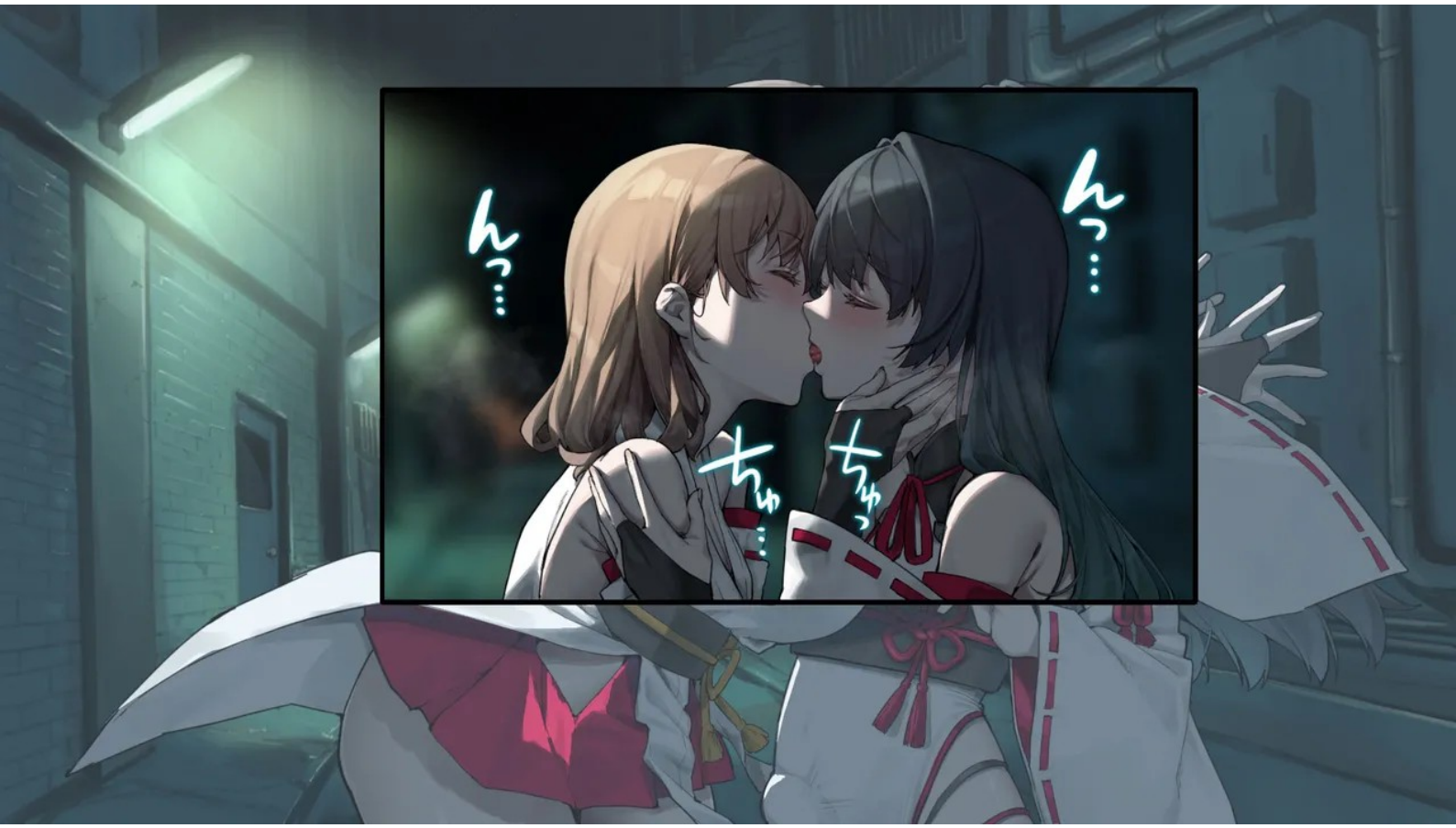

はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
とろぉ…
くぅっ…


ふふっ
ふふっ


オッ
キィ


はぁ♥
はぁ♥
はぁ♥
ガバッ
むにゅっ
むちっ


んっ…
ちゅっ
んっ…

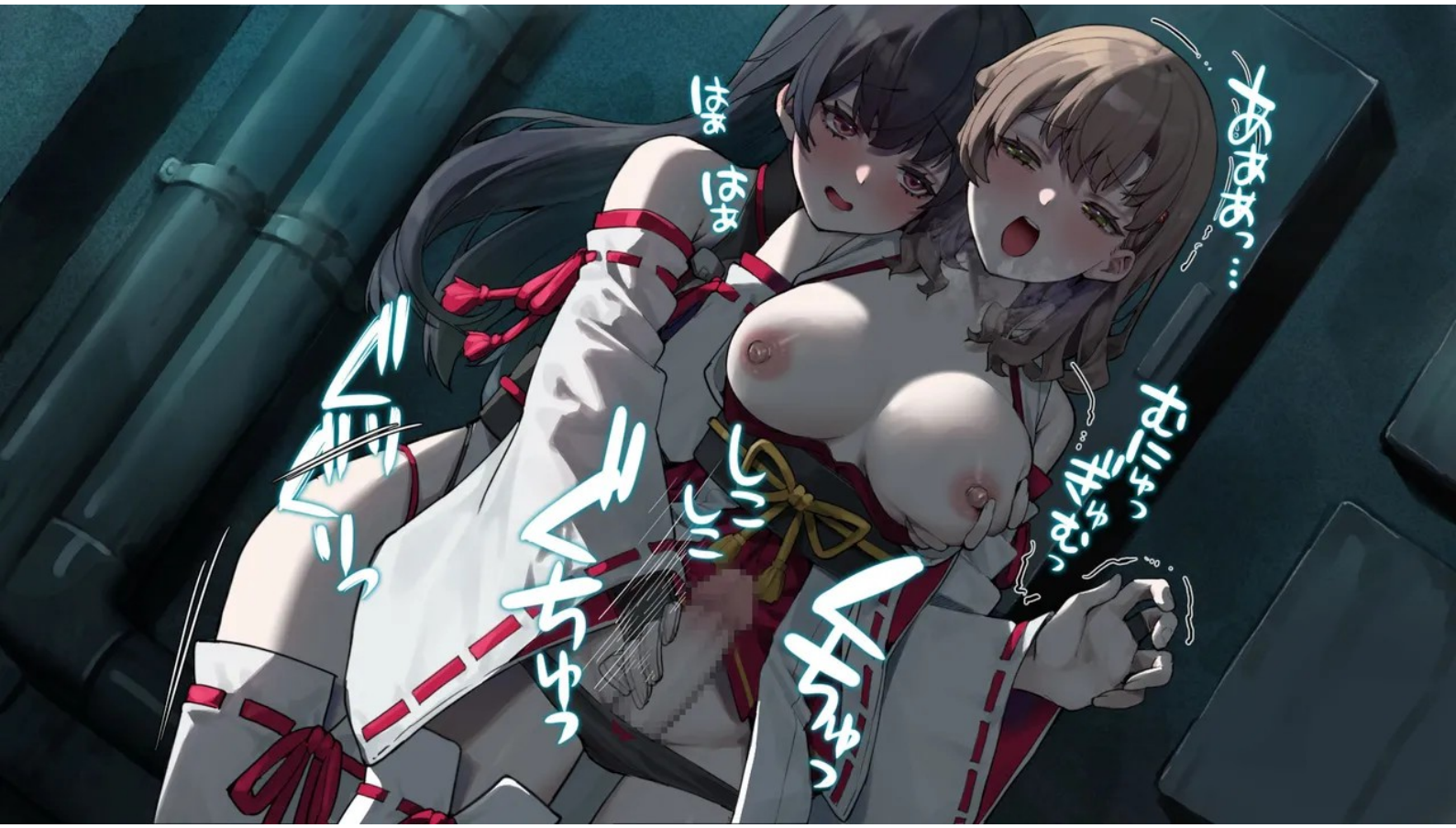

んっ…
んっ…
ちゅっ
ちゅ…


ふーっ♥
ふーっ♥
はーっ♥
はーっ♥
むにゅっ
むちっ


あっあんっ
むぁぁっ
きゅっ
はぁはぁ
ガバッ
くりっ


あっ あぐっ
むにゅっ もみゅっ
しこしこ
しゅっ
しゅっ
はぁ はぁ
くりくりっ


あぁぁ…
おにぃちゃ
はぁ
はぁ
くちゅっ
しこしこ
くちゅっ
くりっ


あぁぁ…
おにゃっ
ぁぁっ
はぁ
はぁ
しこ
しこ
くちゅっ
くちゅっ


あぁっ！
はぁはぁ
くりくりっ
ぴゅるるっ
ぴゅくぴゅくっ
ぴゅっ
ぴゅっ
むっ


はーっ
はーっ
はぁ
はぁ
むっ
むっ
とろ
とろ…


はーっ
はーっ
はぁ
はぁ
むっ
むっ
とろ
ろぉ…


はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
あぁっ
ずぷぷっ
にゅぷっ…
びくびくっ


はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
あっ
あっ
びくびくっ
パンッ
パンッ


はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
あんっ
あんっ
びくんっ
パンッ
パンッ


はーっ
はーっ
はーっ
あっ
あっ
ぐちゅっ
ぬちゅっ
びくびくっ


はーっ
はぁぁっ
はーっ
あぁぁ
はーっ
パーン
パーン
びくっびくっ


はーっ
はぁぁっ
はーっ
あぁぁ
はーっ
パーン
パーン
びくっびくっ


はーっ
あああっ
はーっ
はーっ
あああっ
ビクビクッ
びゅるるるっ
びゅーっ
びゅくっ！


はーっ
あぁ…
はーっ
はーっ
あぁっ…
どろぉっ…
どろぉっ…
ビクッ
ビクッ


はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
あぁっ…
どろっ…
どろぉっ…
ビクッ
ビクッ


はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
むにゅっ
びくっ
きゅっ
びくんっ


はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
びくっ
きゅっ
びくんっ
ぐりぐりっ


んっ
ちゅっ
んっ
ちゅっ
びくっ
きゅっ
びくんっ
ぐりぐりっ


ちゅっ
ちゅっ
れろっ
ぎゅうっ
びくんっ
びくんっ
ぐりぐりっ

はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ぶしゅっ
びくんっ
びくびくっ


ふーっ
ふーっ
ちゅぱっ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅぱっ
ふーっ
ふーっ


ふーっ
ふーっ
んあぁ！
ちゅるっ
んちゅっ
ふーっ
ふーっ


ぐぐっ
ふーっ
ふーっ
ふーっ
ふーっ
ちゅるっ
ちゅっ


んーっ
んーっ
ちゅぽっ
ちゅるるっ
ちゅぽっ
ちゅるるっ
んーっ
んーっ


んん～っ
じゅるるるっ
じゅるるるっ
んん…


ふーっ
ふーっ
ちゅぱ
ちゅぱ
どくどくお…
どくどくお…
ちゅぱ
ちゅぱ
ふーっ
ふーっ


ふーっ
ふーっ
どくどくぉ…
どくどくぉ…
ふーっ
ふーっ


ふーっ
ふーっ
どくどくぉ…
どくどくぉ…
ふーっ
ふーっ


んんっ
あぁぁっ
びくんっ
ぷるぷるっ
にちゃっ


はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
びくんっ
きゅうっ
きゅっ


あっ
はーっ
あんっ
はーっ
パンッ
はーっ
はーっ
ビクビクッ
はあぁっ
パンッ
ぬちゅっ
ぬちゅっ


んんっ
はーっ
んっ
パンッ
はーっ
はーっ
はーっ
ビクビクッ
パンッ
あんっ
あっ


やぁっ
はーっ
あぁっ
パンッ
はーっ
はーっ
ぬちゅっ
ぬちゅっ
ぬちゅっ
パンッ
はーっ
んっんんっ


やぁっ
はぁっ
あぁっ
パンッ
はぁっ
はぁっ
はぁっ
しこしこ
くちゅくちゅ
ぎちゅぎちゅっ
ぱちゅんっ
パンッ
あんっ
あっ


あんっ
はーっ
パンッ
はーっ
あっ
はーっ
はーっ
パンッ
しこしこ
くちゅくちゅ
ぬちゅぬちゅ
ぬちゅんっ
あんっ
あっ


はぁっ
あぁあっ！
はぁっ
はぁっ
はぁっ
あぁあっ！


ぴゅるっ
はーっ
ああぁ！
はーっ
ぴゅるるるっ！
ああぁ！
はーっ
はーっ
どくどくっ
ぴゅくんっ


はーっ
あぁ…
どろぉ…
はーっ
はーっ
はーっ
はぁ…


はーっ
ふふ
はーっ
どろぉ…
はーっ
はーっ
あはは


はぁ
ぎゅっ
むにゅっ
はぁ
ぐぷぷっ…


んっ
ちゅっ
むにゅんっ
ちゅっ
ぱんぱんっ
ちゅっ
ちゅっ


ちゅっ
ぎゅっ
れろっ
むにゅんっ
ぎゅちゅっ
ぐちゅっ
パンパンパンッ


はーっ
はーっ
あぁっ
ぎゅうっ
あんっ
むにゅんっ
ぬちゅんっ
ぬちゅんっ


はーっ
はーっ
あぁっ
あんっ
むにゅんっ
びくびくっ
びくびくっ
ぬちゅんっ
ぬちゅんっ


んんっ
ちゅぱ
ぴくん
ぴくん
ぴくん
ぴくん
ぴくん


んんっ
ちゅぱ
ぴちゃ
ぴちゃ
ぴちゃ


ふーっ
ふーっ
ぬっ…
ぴゅっ…
んんっ…
ぴゅるるっ
とろぉ…
ぴゅっ
ちゅんっ…


ふーっ
ふーっ
ぬっ…
とろぉ…
ふっ…


…！
ぷにっ
ぎゅっ…
とろぉ…


ちゅっ…
んっ…
もっ…
とろお…


エッグ倶楽部


エッグ倶楽部


エッグ倶楽部



